

## 考古学講座

# かながわの縄文文化の起源を探る

1 問題提議 縄文時代草創期研究の現状とその課題  
(財)かながわ考古学財団 白石浩之

2 発 表 かながわの縄文時代草創期文化

花見山式土器とその周辺－南武藏－  
(財)横浜市埋蔵文化財センター 坂本 彰

隆線文期の居住活動－湘 南一  
慶應義塾大学 桜井準也

いわゆる隆線文土器以前の様相－県 央一  
大和市教育委員会 村澤正弘

神奈川県西部の現状  
伊勢原市教育委員会 謙訪間伸

3 発 表 かながわの縄文時代草創期の古環境

かながわにおける縄文草創期の使用石材  
都立青山高等学校 柴田 徹

植生を中心とした縄文草創期の自然環境  
川崎市青少年科学館 増渕和夫  
上西登志子

4 討 論 会 パネラー 坂本 彰・桜井準也・村澤正弘・謙訪間伸  
柴田 徹・増渕和夫・上西登志子

コメンテイター 織笠 昭・鈴木保彦・鈴木次郎  
戸田哲也・小林謙一・謙訪間順  
加藤勝仁

講 評 岡本 勇

司 会 白石浩之

1996・3・3

神奈川県考古学会

考古学講座  
《かながわの縄文文化の起源を探る》

開催の目的

神奈川県考古学会では県下の考古学の現状を理解していただきために、毎年考古学講座を開催しております。昨年は《かながわの古代集落》を開催し、好評を得ました。今回は少し時代を遡って約12,000年前の縄文時代の始まる頃に焦点をあて、この討論会で深く当時の様相を再現したいと考えています。

縄文時代の基底をつくりだしたこの縄文時代草創期文化をみなさんと共に解明しましょう。

1996年3月3日

神奈川県考古学会

## 問題提議

# 縄文時代草創期研究の現状とその課題

白石 浩之

## 1. はじめに

今なぜ縄文時代草創期かと言えば、かながわの縄文時代草創期の遺跡、遺構は他地域と比べると、豊富に検出され、該期の主要遺跡の文献も比較的多く刊行されている。そこには多くの情報が集積されている。それをどのように引き出しから引っぱってきて縄文時代草創期の生活の内容を描くか、私たちに課せられたているからである。

## 2. 縄文時代草創期前半の土器の再検討

### かながわ最古の土器

縄文時代草創期の研究は土器起源論が主流をなしてきた。それは山内清男が『日本遠古之文化』の文化の中で「縄紋土器の由来を知るには、先づ最も古い縄紋土器を決定する必要がある。」(山内1932)と指針を述べて以来、常にセンセーショナルな話題を飾ってきた。最古の土器は沈線文土器→撫糸文土器→隆線文土器→無文土器そして豆粒文土器へと層位学や型式学から追求され、今日東日本では寺尾式土器がその座につくかどうか論議されている(白石1988, 栗島1988, 鈴木1991)。それでは縄文土器の底は確定されたかというと、どうもそこまで至らない。話題の新鮮さがそこにある。一体最古の土器の文様や形態はどのようなものなのか。

神奈川県下では幸いにして縄文時代草創期の資料が豊富に発見されている。加えて自然層が比較的厚いため、出土遺物を層位的に捉えられるわけである。

大和市上野遺跡では隆線文土器が富士黒土層下部から、無文土器がソフトローム(L1S)層中から層位的に出土した(相田1986・村澤1989)。このことも一つの契機になって、寺尾遺跡(白石前掲)や相模野No149遺跡(鈴木1989)の遺物が改めて脚光をあびることになった。また宮ヶ瀬遺跡群北原遺跡でもL1S中位スコリア層から無文の土器片が石槍を伴って出土している(市川他1995)。

寺尾遺跡や相模野No149遺跡の土器は帯状つまり有段の口縁に押捺文が施されている。特に寺尾遺跡の土器は縄か棒状工具による刺突文か論議が分かれるところであるが、縄とする仮説の立場に立つならば、縄の施文は既に多様な用い方をしていたものと類推される。また寺尾の土器は①隆線文土器以前、②隆線文土器の仲間、そして③爪形文土器以降の多縄文土器の中で理解しようとする諸説がある。筆者は①説をとる。寺尾遺跡等の類品は東京都多摩ニュータウンNo796遺跡にある(石井・武笠1988)。口縁部は斜格子目状の文様を施していた。しかし斜格子目状のモチーフは隆線文土器にも残存しているところから、寺尾式土器よりは新しく、花見山式土器より古い位置づけをした方がその変遷を考えうえではスムースであろう。上野遺跡や勝坂遺跡(青木・内川1993)の土器と寺尾遺跡の土器との新旧関係は土器型式からでは難しい。今言えることは前者の遺跡の土器はどうも寺尾式土器の段帯部をも

つ文様構成をとらないらしい。

#### 花見山式土器について

隆線文土器については花見山遺跡の豊富な資料によって、改めて検討する必要が出てきた。花見山1式の隆点文土器をどのように理解するのか、今後話題になりそうである。つまりこのモチーフは今まで類例をみなかつたもので、口縁に沿って、比較的太めの隆帯を横位に連続的ないし断続的に貼り付けて構成させている。このような隆線文土器が果たして花見山式土器の中でも最古期のものかどうか。仮に最も古い所産としても隆点文土器のみで構成するかどうか問題が残る。また横位の隆線文と縦位に垂下するハの字形爪形文の構成は、隆線文土器の中でも大塚達朗氏によって古期と推定される南原遺跡(大塚・小川・田村1980、大塚1982)や多摩ニュータウンNo426遺跡(原川・鈴木1981)の横位隆線に接して垂下する隆線文と同様なものかどうか論議されなくてはいけない。ハの字形爪形文が大きな鍵を握っているように思われる。時期の異なる隆線文土器同士がオープンサイトでは層位的に出土していない状況下で、今確実に隆線文土器の変遷が理解されている点は、1ないし2条の横走する隆線文土器から幾何学状ないし多条の横走する隆線文土器へ変遷する新旧関係だけであると言っても過言ではないであろう。隆線文土器の変遷の秩序は遺構や遺跡毎の組成構成をつかみ相互比較検討することが必要であろう。

#### 本ノ木式土器について

多縄文土器あるいは押圧縄文と呼称される本ノ木式土器の位置づけは本ノ木遺跡の発掘当初から論議が及んでいる(山内・佐藤1962)。わたしは寺尾遺跡の再検討以後、隆線文直前に位置づけている。佐藤達夫氏が「縄紋式土器研究の課題—特に草創期前半の編年についてー」(佐藤1971)で本ノ木式土器を隆線文土器の直後に位置づけたのは隆線文土器と本ノ木式土器が密接な関係を有していると考えたからであろう。わたしはこの佐藤氏の視点を尊重し、その変遷觀を、逆に本ノ木式土器から隆線文土器の変遷を推定するのである。いわゆる多縄文土器と呼ばれる一群の土器は一度解体して、再検討する必要があろう。その場合鍵になるのが、[ハ]の字形爪形文の消長であろう。というのは[ハ]の字形爪形文土器が隆線文土器のみならず、爪形文土器や多縄文土器にまたがって施文されているからである。

### 3. 神子柴・長者久保系石器群の範囲

#### 神子柴・長者久保系石器群と細石器

縄文時代草創期の石器で常に問題になるのが神子柴・長者久保系石器群の範囲と細石器の共伴問題である。月見野上野遺跡、寺尾遺跡、相模野No149遺跡、勝坂遺跡、長堀北遺跡(小池1991)では削片系の細石器と石槍石器群が共伴する遺跡と伴わない遺跡がある。後者の遺跡は隣の東京都多摩ニュータウンNo796遺跡、前田耕地遺跡(宮崎1983)、狭山遺跡B地点(吉田1970)にも見られる。筆者はこの石槍石器群の全てを神子柴・長者久保系石器群とすべきかどうか疑問に思っている(白石1993)。また削片系の細石核の流入が一時期の限られた所産とは考えていない(白石前掲)。加えてその全てを北方系と捉えるのは

時期尚早である。岡本東三氏のように、神子柴・長者久保系石器群と細石器は伴わないという視点もある(岡本1993)。問題は両石器群がもともと別々の石器群であったが、ある時期、ある地域で合体したものが、あるいは当初から組成していたものなのか。この点については未だ解決していないのである。

#### 神子柴型尖頭器の出現について

相模野台地では神子柴・長者久保系石器群に土器が共伴するのは、L1S層上部であるが、L1S層中部、L1S層下部まで遡る土器共伴例は知られていない。また県下では荒屋型彫器を伴う削片系の細石核が検出されていないが、この細石器は本州地方では神子柴・長者久保系石器群の共伴が認められないようである。因みに栗原中丸遺跡ではB0層上部(鈴木1984)で珪質頁岩製の木葉形尖頭器が出土しており、その形態から神子柴型尖頭器に相当する(白石1991)。そうであるならば栗原中丸遺跡B0層上部の石槍は県下で神子柴・長者久保系石器群の最も古い一例となる。今後、かながわのL1S層中～B0上部出土の石器群の探索に努めなければならないであろう。

### 4. 集落論研究の一歩

近年縄文時代草創期の生活の様相が少しづつ明らかになってきた。慶應義塾大学藤沢校地キャンパス内遺跡(岡本・桜井・小林1992)をはじめとして勝坂遺跡、花見山遺跡、南鍛冶山遺跡(桜井1993)では住居状遺構や竪穴状遺構が検出している。南鍛冶山遺跡や慶應義塾藤沢校地遺跡内では土器集中箇所、炭化物集中、剥片ないし碎片集中そして礫集中等が認められている。

このようにみると、住居の形状は多様であり、しかも大きさも一定しているわけではない。住居か否か決め手の一つとなる炉址も焼土址であり、屋内外一定しているわけではない。炭化物が屋外に存在するところから、住居内には炉址は構築しなかったのではないか、といった見方もある。また遺物分布も遺構外にも及んでいることが多く、主たる生活が遺構内で行われたものではなかったらしい。住居状遺構や竪穴状遺構は家族単位の居住施設と限定する必要がなく、用途に応じて構築し、時としで風雨や寒さを防ぐ目的を兼ねたものかもしれない。例えば前田耕地遺跡の竪穴状遺構はサケ漁や石器製作に伴う作業小屋兼寝泊まりする施設として考えられる。そうであるならば、縄文時代草創期の住居状遺構や柱穴遺構、竪穴状遺構や焼土、炭化物、配石などの遺構と遺物の分布を通して検討することが縄文時代草創期の住居状遺構の実体が解明されるであろう。

### 5. 縄文時代草創期の石材流通

縄文時代草創期の石材獲得は、石器1個を製作するうえで大きな用材が必要とされ、しかも多数を製作するとなると、スリムにして集落内に持ち込むことになる。そのために、中継基地を介して、石器の半製品が作られる。そしてそれらの未製品が集落や狩り場へ持ち込まれ、製品に作り上げられた蓋然性が高い。中継基地の一つとして埋納遺構(デポ)が存在する。しかし埋納遺構だけでなく、例えば寺尾遺跡や吉岡遺跡群(白石・砂田1992)に認められるように、細部的な加工によって、完成した石槍を作り出して、その製品を別の遺跡に搬出していくような細部加工製作址も認められる。

後期旧石器時代では、原産地と集落の結びつきが高く、中継基地を介在するようなことは少ない。このことは縄文時代草創期が石器に対する石材獲得が組織的に行われてきたことを意味しており、その背景に集団の領域(テリトリー)が形成され、原産地まで直接石材獲得しなくとも、(別集団を介する場合もある)容易に獲得出来るようなシステムが作られようになってきたことを意味しよう。このことから、縄文時代草創期は旧石器時代の遊動生活から、少しずつ脱却して少なくとも一定期間一定地域に居住しようとする半定住生活に変化してきた兆しが認められ、ここに縄文文化の基層が構築されたものと思われる。

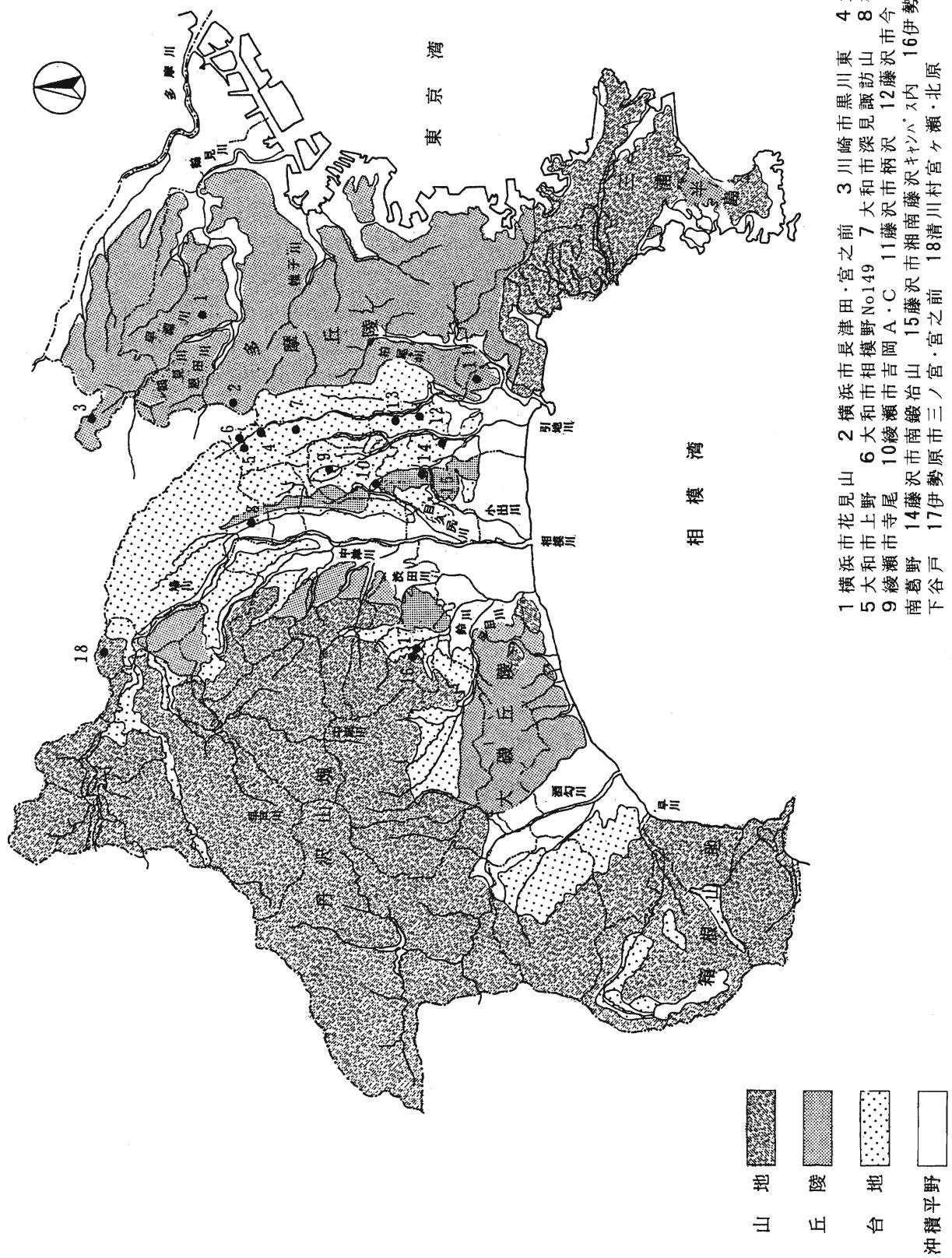
## 6. おわりに

かながわでは今から約12,000年前の縄文時代初頭の遺跡が多く検出されている。とりわけ藤沢市慶義塾大学湘南藤沢キャンパス内遺跡や花見山遺跡の主要遺跡の報告書が刊行された。これらの遺跡は豊富な出土遺物はもとより、各種遺構が検出されたことにより、今まであまりわからなかった生活様相の解明に役立つものと期待される。またかながわでは縄文時代草創期の中でも最も古い時期の遺跡が検出され、併せて旧石器時代終末期の石器群も層位的に出土している例が多い。縄文文化の起源を語るうえで、常にかながわの遺跡があたかもドラマの主役のように演じられるのはそのためである。

今回企画した【かながわの縄文文化の起源を探る】討論会を通してかながわの縄文時代草創期の遺跡を理解していただくと同時に、かながわの遺跡が投げかけるいろいろな問題点が学会のなかでどのように理解されているのか、是非注目していただければ幸いです。

## 参考文献

- 相田 薫1986「第Ⅱ文化層」『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』大和市文化財調査報告書21
- 青木豊・内川隆志1993『勝坂遺跡45次調査』
- 市川正史他1995「清川村官ヶ瀬遺跡群北原(Ho1.0.11北)遺跡」『第19回神奈川県遺跡調査・研究発表会要旨』
- 大塚達朗・小川静夫・田村隆1980「市原市南原遺跡第2次調査抄報」『伊知波良』
- 大塚達朗1982「陸繩文土器見一関東地方出土当該土器群の型式学的位置ー」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』1
- 栗島義明1988「陸繩文土器以前」『考古学研究』35-3
- 小池 啓1991「長堀北遺跡」『大和市文化財調査報告書』39
- 石井則孝・武笠多恵子1989「多摩ニュータウンNo790」『東京都遺跡調査・研究発表会』14
- 佐藤達夫1971「繩紋式土器研究の課題」『日本歴史』277
- 坂本彰1995「第3章 縄文時代草創期」『花見山遺跡』港北ニュウタウン地域内埋蔵文化財調査報告X VI
- 白石浩之1988「第Ⅰ文化層」『寺尾遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告18
- 白石浩之・砂田佳弘1992「神奈川県綾瀬市吉岡遺跡群における神子柴・長者久保系石器群の終末とその様相」『日本考古学協会第58回総会研究発表要旨』
- 白石浩之1993「細石器石器群の終末と神子柴・長者久保系石器群との関連性について」『細石刃文化研究の新たなる展開』
- 鈴木次郎1989「相模野No149遺跡」大和市文化財調査報告書34
- 鈴木正博1991「寺尾式土器の再吟味(前編) - 大塚達朗「窩紋土器研究序説」(前篇)の思惑違-」『古代』92
- 桜井準也・小林謙一1992「第3章 縄文時代草創期第2文化層」『湘南藤沢キャンパス内遺跡』第2巻
- 桜井準也1993「神奈川県藤沢市南鍛冶山遺跡の調査」『日本考古学協会第59回発表要旨』
- 原川雄二・鈴木俊成1981「No426遺跡」『多摩ニュータウン遺跡』東京都埋文化財センター調査報告1
- 村澤正弘 1989「縄文時代一定住生活の確立と土器文化ー」『大和市史』1
- 宮崎 博1983「縄文草創期の住居氏址 - 東京都秋川市前田耕地遺跡ー」『季刊考古学』4
- 山内清男1932「繩紋土器の起源」『ドルメン』1-5
- 山内清男・佐藤達夫1982「縄文文化の始まる頃」『科学読売』12-13
- 吉田 格1970「狹山遺跡B地点」『狹山・六道山・浅間谷遺跡』東京都瑞穂町文化財調査報告1



第1図 神奈川県における縄文時代草創期の主要遺跡

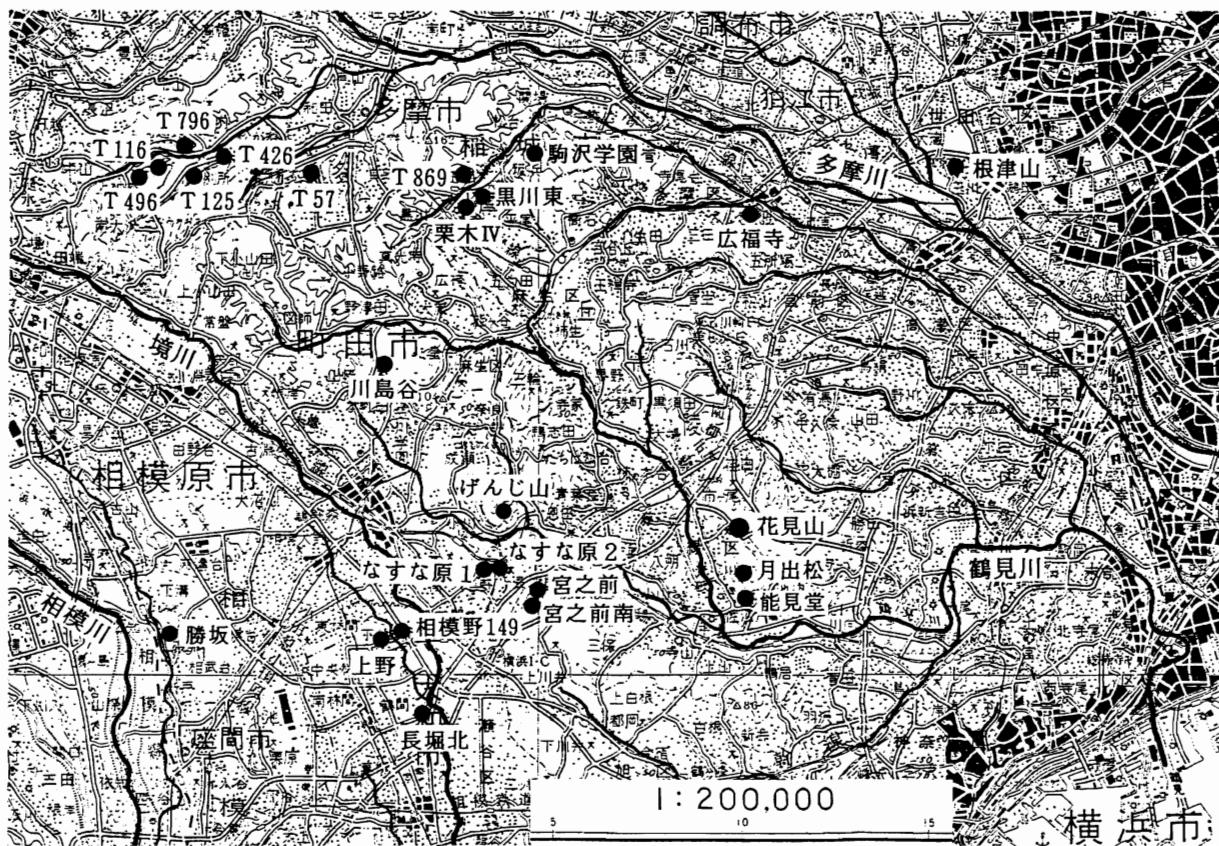
# 花見山式土器とその周辺—南武蔵—

坂本 彰

## 1. 地域と遺跡分布

多摩丘陵は広大な関東平野の南西部に位置し、都下八王子市付近を起点として東南方向に広がり、東京湾寄りは下末吉台地となる。本地域はおよそ北を多摩川・南西を境川に挟まれ、広さは東西約30km・南北約20kmを測る。丘陵は多摩川や鶴見川の本支流によって複雑に開析され、樹枝状の支谷が発達している。地域西半部の丘陵上面は尾根状をなし、対称的に東半部は平坦面が多い。草創期はちょうど寒冷期から温暖期への移行期にあたり、関東ロームにおおわれた台地上には落葉広葉樹林が広がっていた。約6000年前の温暖期には、縄文海進により東半部に多数の溺れ谷が形成された。この地形的特徴は遺跡の立地に深く影響を与え、縄文時代の大規模集落址は下末吉台地寄りに多い。

多摩川と境川の間にある先土器時代終末～縄文時代草創期(燃系文以前)の遺跡は、およそ150か所を数える。比較的早くから開けた横浜や川崎の東部が少なく、多摩・港北ニュータウンそれに小山田・長津田などの大規模開発地区にやや集中している。河川沿いの台地とか谷奥の尾根筋といった偏よりではなく、ほぼ全体に散在している。遺跡の大半は少数の石器(主に槍・刺槍)が単独出土するもので、これらは獵場などの一時的立寄地とみられる。土器が伴なう遺跡は20か所で、大栗川・三沢川・鶴見川・恩田各川の中流部に集中している。いずれも谷に面した低位台地にあり、この時期の居住地とみられる。そのうち多摩796・同426・花見山・能見堂では多数の、多摩27・なすな原1・同2・宮之前・同南では少数の剥片があり、あきらかに石器が製作されていた。少数の土器または石器が出土したその他の遺跡は、比較的短期の滞在地あるいは立寄地と考えられる。



第1図 隆線文土器の遺跡分布状況

## 2. 花見山遺跡のあらまし

花見山遺跡は現横浜市都筑区見花山にあり、1977～78年に港北ニュータウン埋蔵文化財調査団が発掘調査した。遺跡は鶴見川中流の東岸、大熊川谷の源頭部に北面する標高53mの低位台地上にある。草創期の遺構と遺物はA区中央の東西40m・南北30mの範囲、富士黒土層の下部からソフトローム層の上部にかけて分布していた。竪穴1基と配石3基は遺物集中域の西半部にあり、1号竪穴は壁と柱穴のみの一辺3m前後の方形住居とみられる。配石はいずれも作業用の台石と考えられ、時期は1号竪穴と3号配石が古く、1・2号配石が新しい。

石器は全部で約1300点を数え、石材は主にチャート・安山岩・流紋岩が用いられている。全体は尖頭・刃・側面・製作器の4類に大別でき、製作器(残核・剥片)が約6割をしめる。製品の器種は尖頭器(槍・刺槍・鎌・錐)・刃器(打斧・植刃・指形搔器・搔器・削器・抉入削器・分割器)などの剥片石器を中心で、他に打割器・台石などがある。製作の特徴は素材を応用的にもちい、使用の際は徹底利用している。器種では刺槍・刃器類が充実しており、これらを「花見山型石器群」とよぶ。

土器は約1400片あり、およそ120個体と判明した。形態は平縁の深鉢で、底部は丸底を主体とするが乳房状尖底もみられる。一部の器面には煤が付着し、胴下半部は加熱のため欠けている。8点に補修孔が、半数近くにいわゆる獸毛痕がみとめられる。文様は太・細・微三種の隆線が中心で、ハの字文も多く、他に斜格子・無文があり、これらの組み合わせを「花見山式」と名づけた。

このように縄文時代初頭の集落の様相を統一的に把握した点に、本遺跡の最大の意義がある。

## 3. 花見山式土器について

本式の文様は、a. 隆線・b. 隆線十ハの字・c. ハの字・d. 無文・e. 斜格子の5つがある。

- ・花見山1式(10個体)…西半部を中心に分布し、a・d類のみである。隆線は太く、短隆線が付される。隆線はハの字押捺されて波状をなし、短隆線は刺突され、一部に毛痕がみられる。
- ・花見山2式(85個体)…西半部に分布し、a～e類がそろっている。隆線はすべて加飾され、波状をなす。ハの字文はさまざまなバラエティに富み、明確な文様を構成する。全体が無文の土器や沈線による斜格子文が加わっている。毛痕のあるものが半数におよび、花見山式の主体をなす。
- ・花見山3式(28個体)…中央部を主体に分布し、a～d類がある。隆線は押引きされて本数が多く、加飾されない。ハの字文は衰退し、重複もある。毛痕はみとめられず、乳房状尖底が含まれる。

### 参考文献

村田文夫 1968 「神奈川県川崎市生田広福寺境内採集の隆起線文系土器片について」『古代文化』20-2

増田精一・後藤建 1978 『栗木IV遺跡』

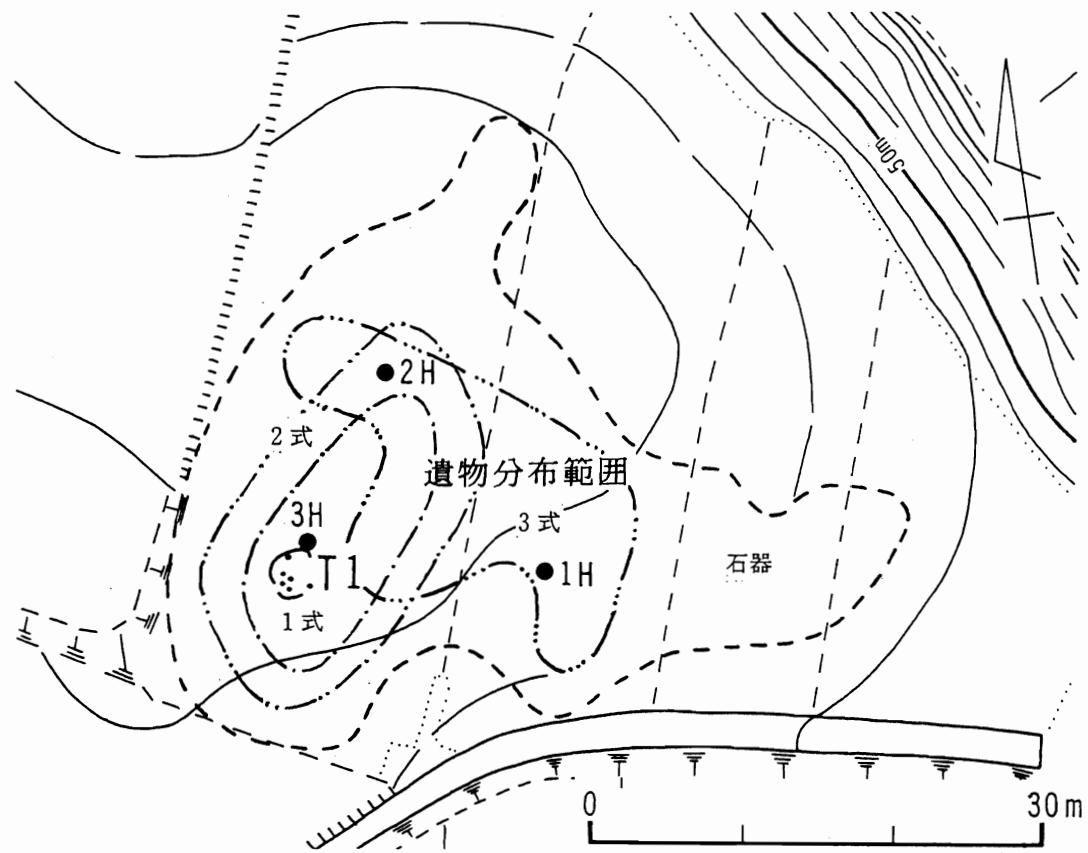
黒川東遺跡発掘調査団編 1980 『黒川東遺跡』

東京都埋蔵文化財センター 1992 『縄文誕生』

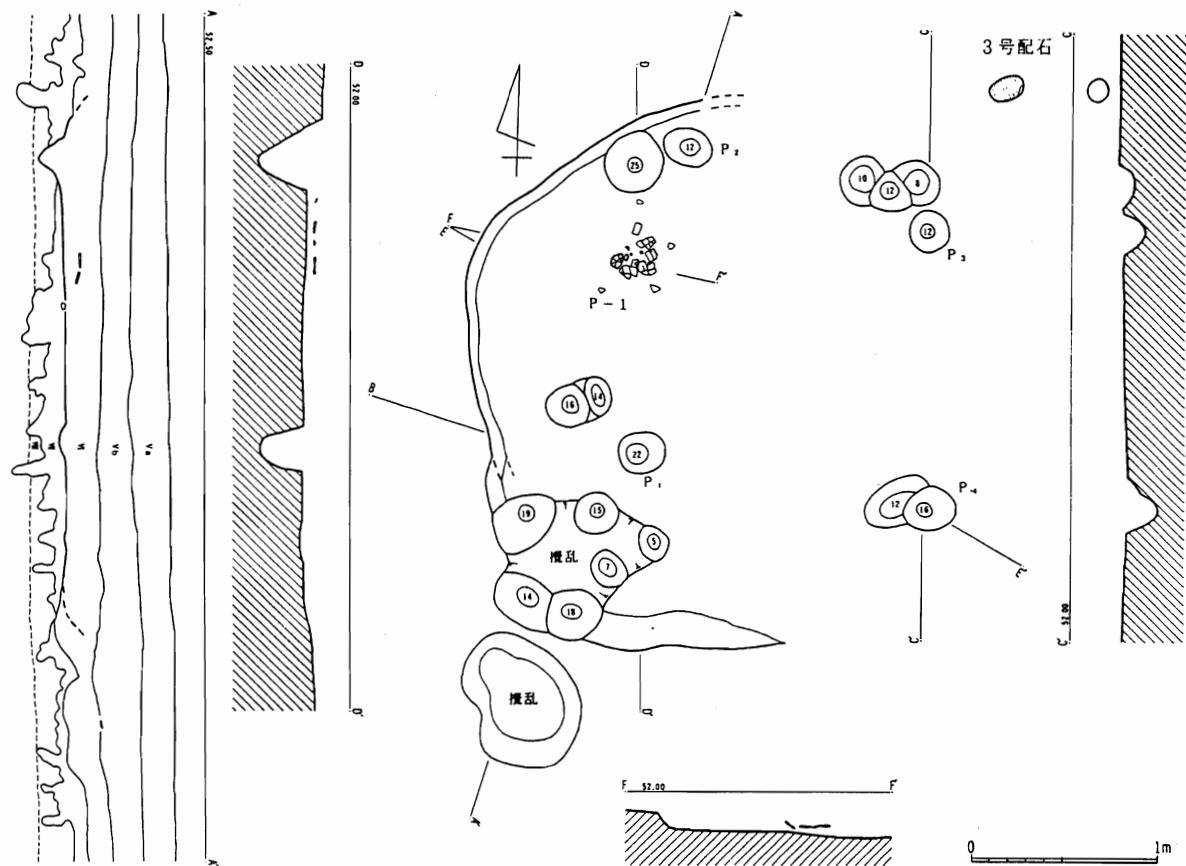
坂本 彰他 1995 『花見山遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告X VI

沖 縄	九 州 南 半	九 州 北 半	四 国	中 国	近 畿 周 边	中 部 南 半	中 部 北 半	関 東	東 北 南 半	東 北 北 半	北海道
	掃除山	泉福寺			武者ヶ谷	九合1	田 沢	花見山1			
		福 井	上黒岩	馬 渡	鳥浜貝塚		狐久保	花見山2	日向西		
	堂地西		穴 神		桐山和田	酒呑ジュ リンナ	石小屋	花見山3	日 向		
渡具知 東 原	上 場	門 田				榎ノ湖1	壬	下 宿		表 館 大新町	
		柏 原			鳥浜貝塚	仲道A	本ノ木	宮 林	一ノ沢	馬場野II	大麻1

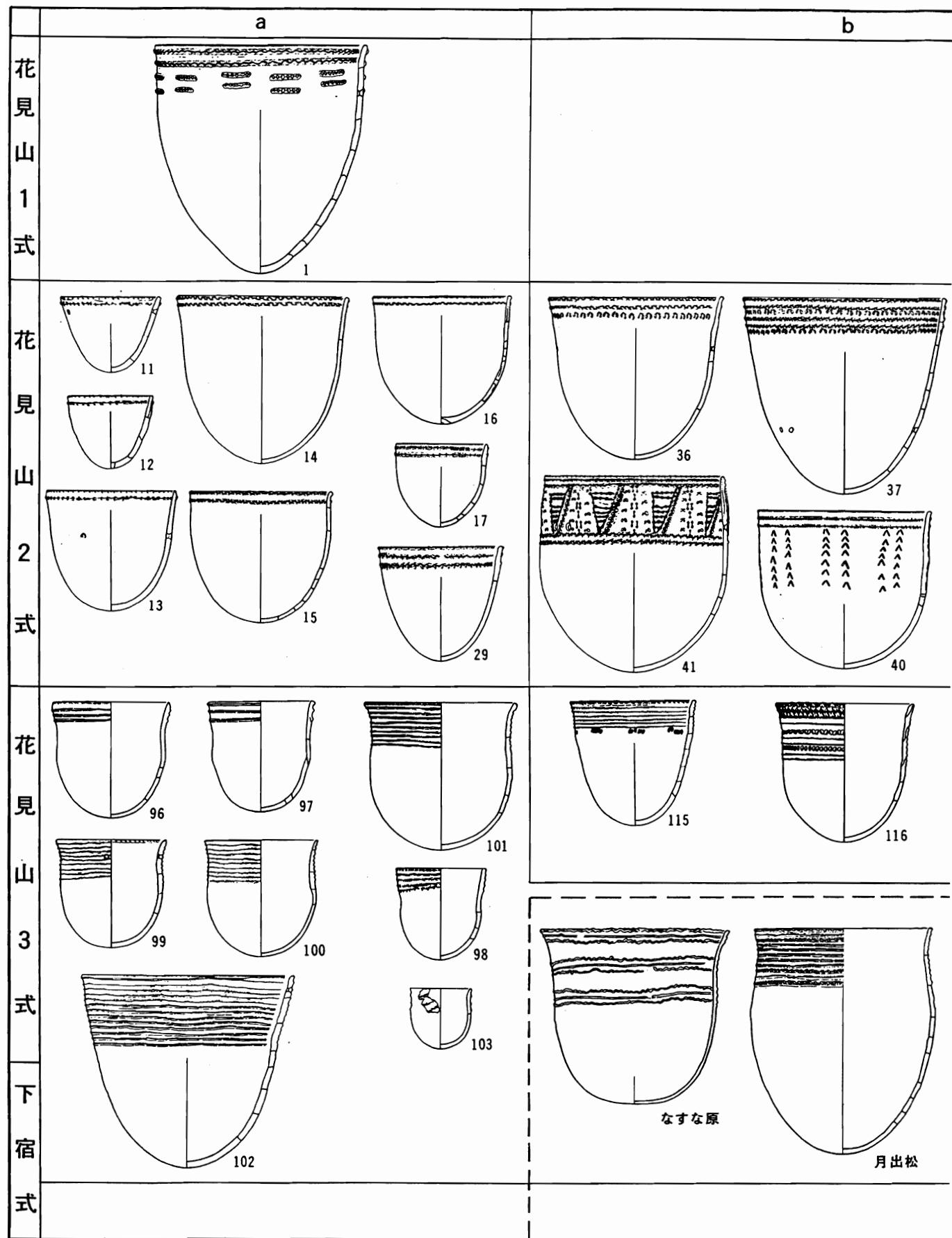
第2図 花見山からみた隆線文土器群の変遷



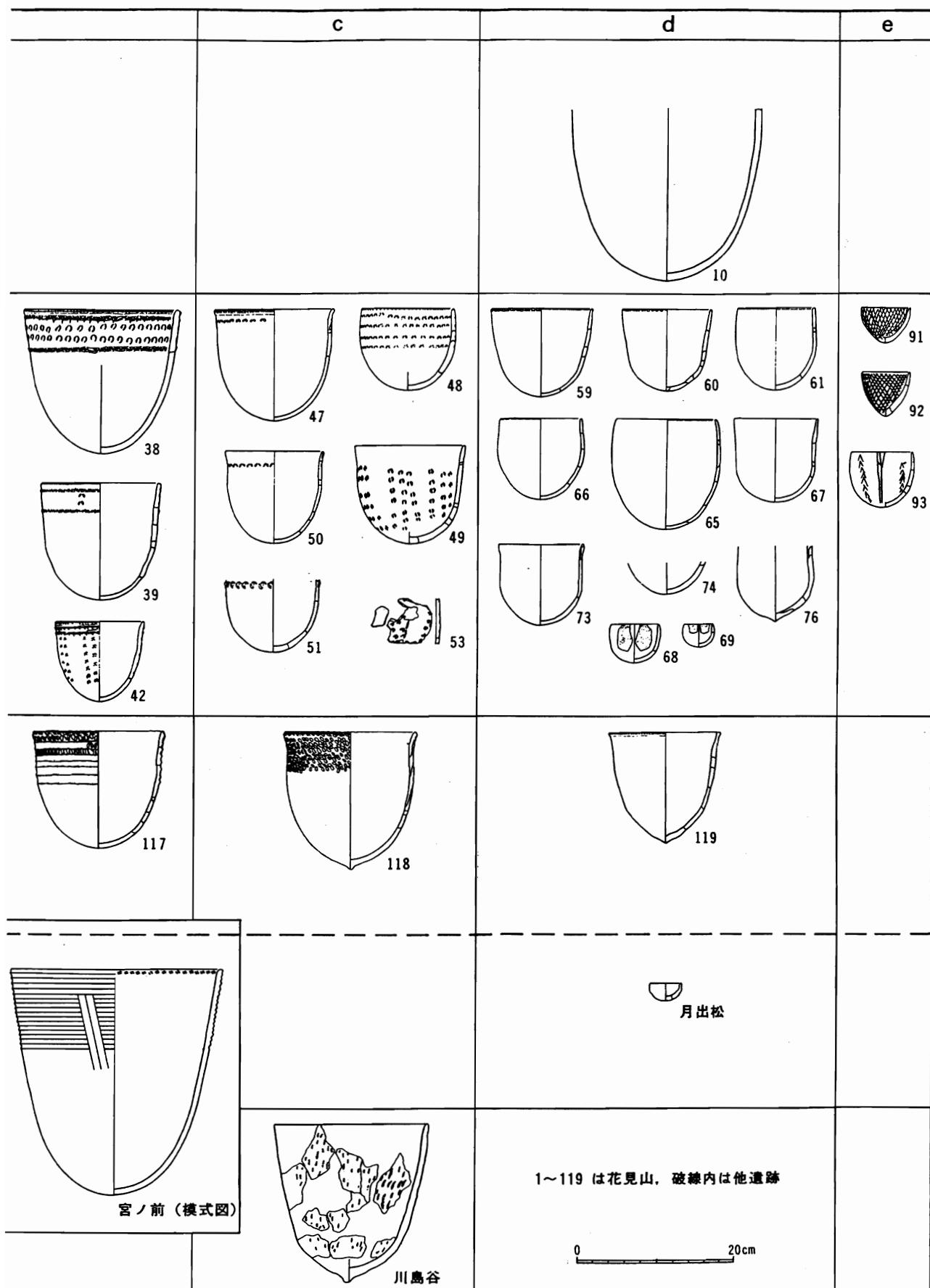
第3図 花見山遺跡の遺物分布状況

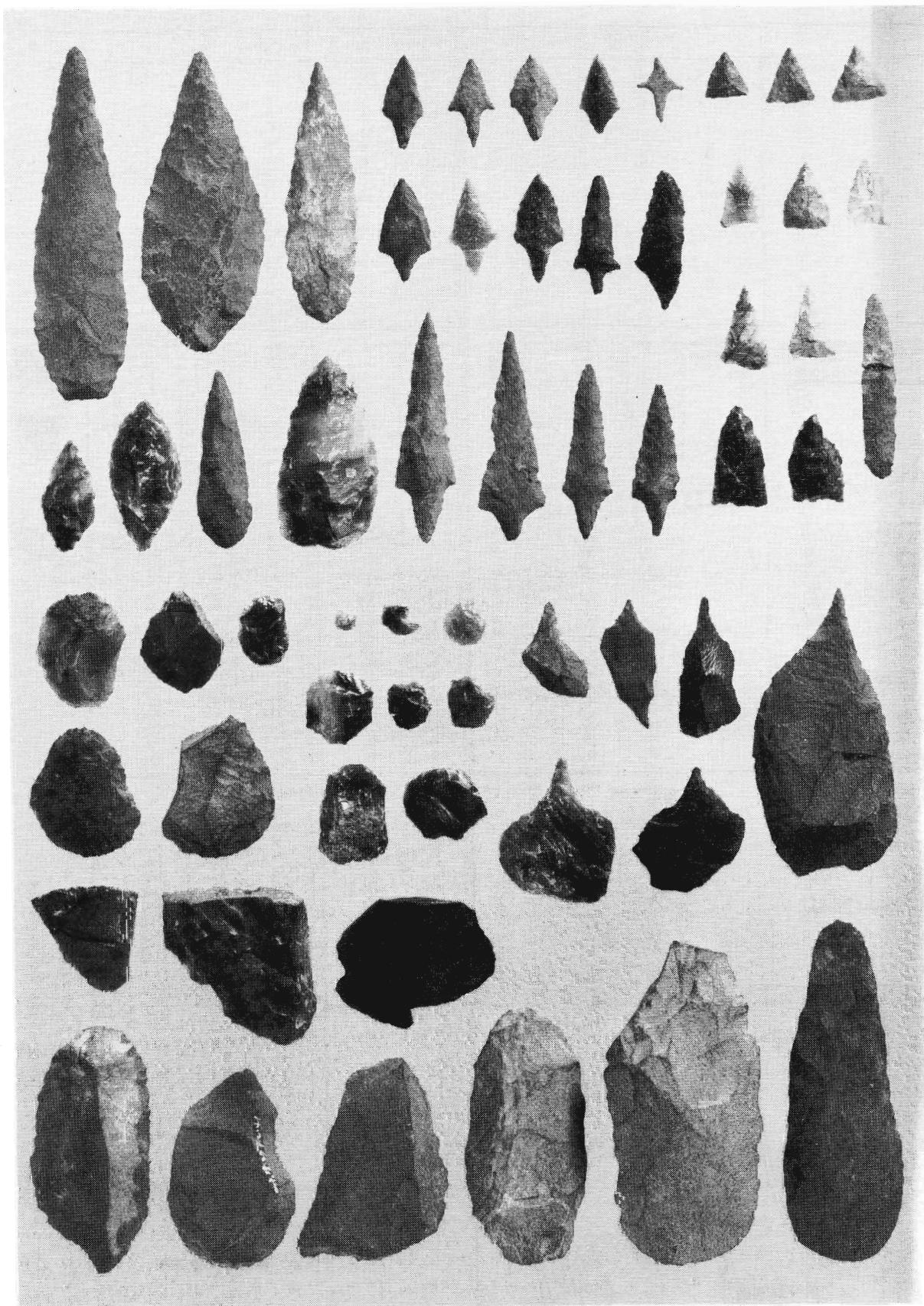


第4図 花見山遺跡の堅穴と配石

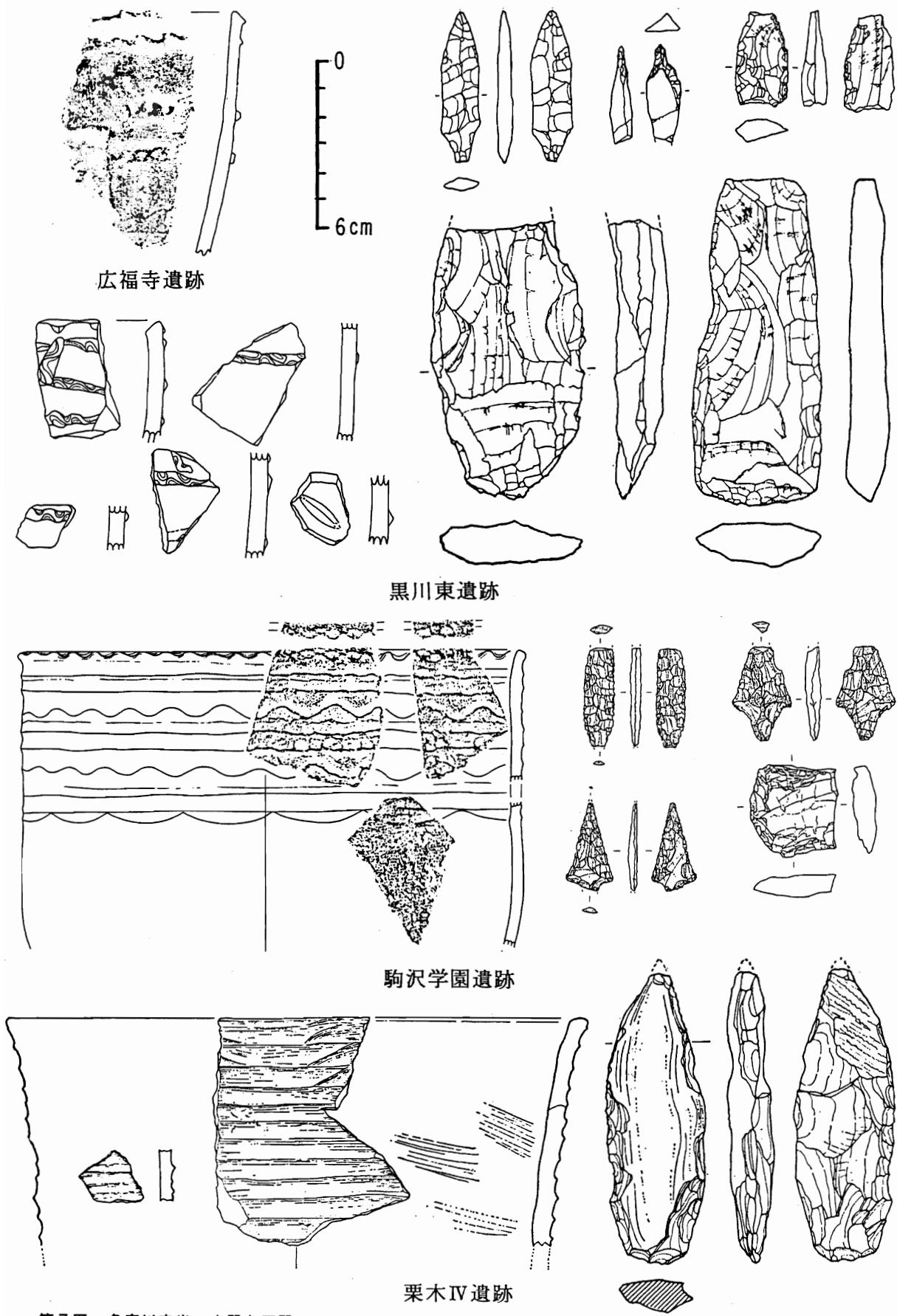


第5図 鶴見川流域の陸線文土器

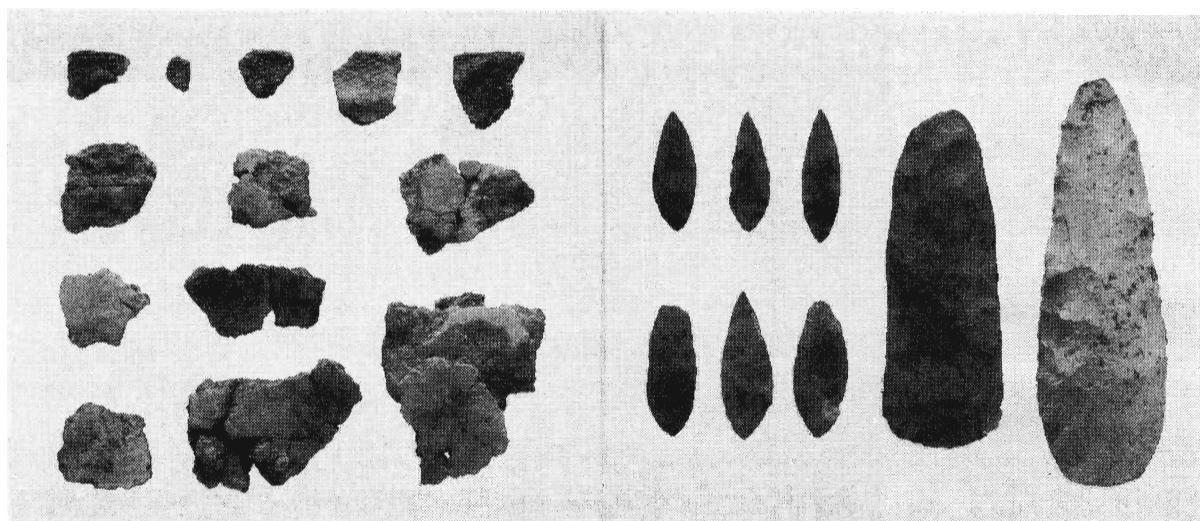




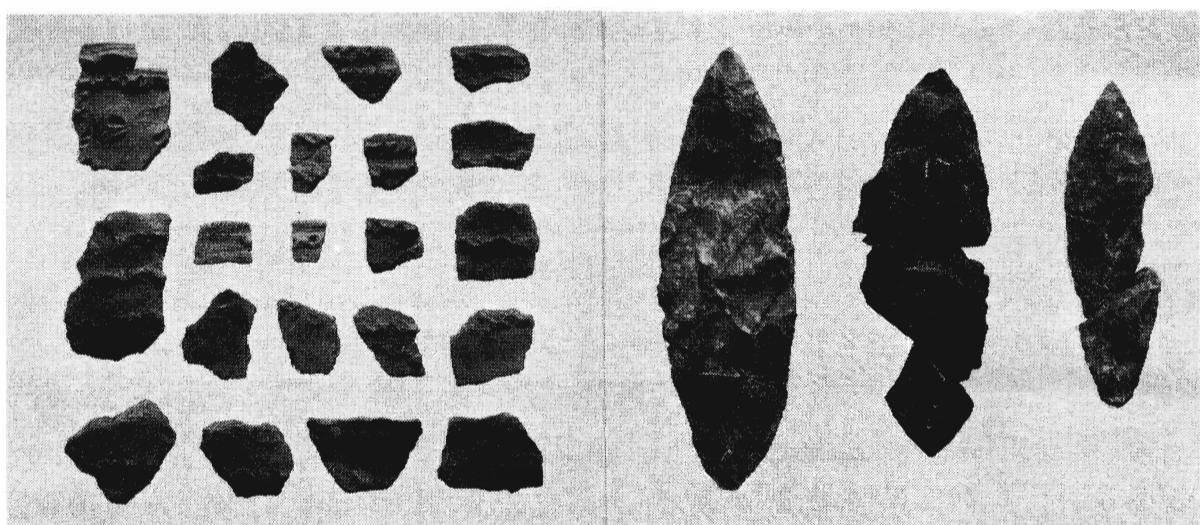
第6図 花見山遺跡の石器



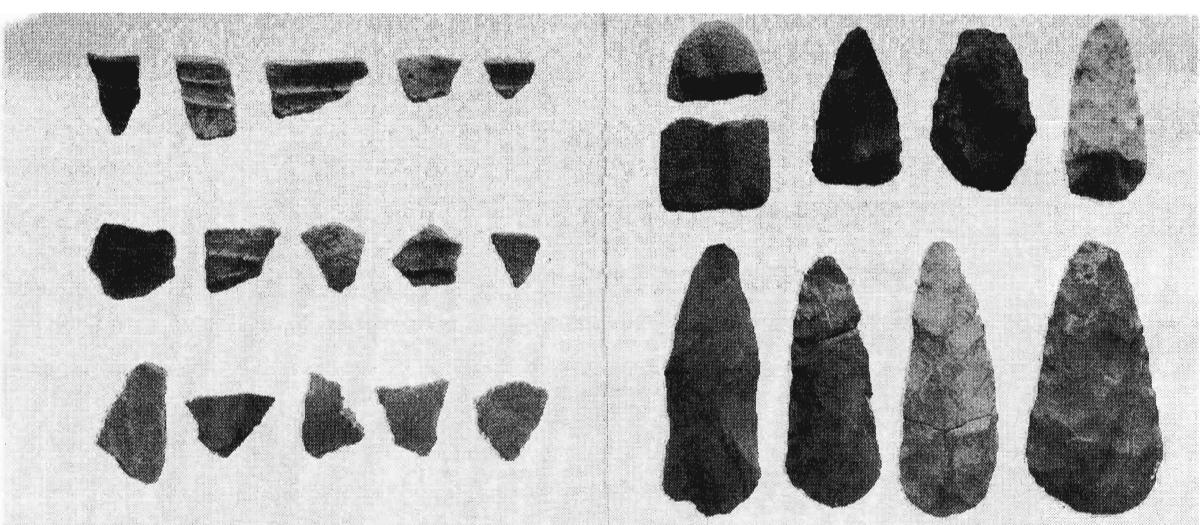
第7図 多摩川南岸の土器と石器



多摩No. 796遺跡



多摩No. 426・27遺跡



多摩No. 116遺跡

第8図 多摩ニュータウンの土器と石器  
財團法人東京都教育文化財団・東京都埋蔵文化財センター原図による

# 隆線文期の居住活動－湘南－

桜井 準也

## 1. 湘南の草創期遺跡

湘南の縄文時代草創期遺跡は、近年調査例が急激に増加しており、周辺地域と比較して分布密度が高い。当地域の草創期遺跡は、その多くが藤沢市内に集中している。茅ヶ崎市、鎌倉市、寒川町でも台田遺跡(茅ヶ崎市 1980)、杉山原遺跡(茅ヶ崎市 1981)、行谷遺跡(茅ヶ崎市 1987)、臼久保A遺跡(松田 1995)、玉縄城跡、県営岡田団地内遺跡(岡田団地内遺跡調査団 1987)などが調査されているが、いずれも尖頭器類が少数出土した事例ばかりである。藤沢市内では当初、西部土地開発にともなう西部215地点遺跡・西部225地点遺跡・西部212地点遺跡(藤沢市西部土地開発区域内埋蔵文化財発掘調査団 1983・91・92)や石名坂遺跡(石名坂遺跡発掘調査団 1979)などの西部地域で草創期の遺物が出土している。その後、北部の代官山遺跡(神奈川県埋蔵文化財センター 1986)で隆線文土器など多量の草創期資料が出土したことを契機として、北部では高倉滝ノ上遺跡(高倉滝ノ上遺跡調査団 1989)、今田遺跡(今田遺跡発掘調査団 1992)、藤沢市No.252遺跡(高倉枯藪遺跡調査団 1993)、藤沢市No.424遺跡(藤沢市No.424遺跡発掘調査団 1995)、藤沢市No.455遺跡(藤沢市No.455遺跡発掘調査団 1995)が調査された。また、西部では慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡(慶應義塾 1992・94)、藤沢市No.452遺跡(遠藤土地改良区内遺跡発掘調査団 1994)、用田バイパス関連遺跡(中田 他 1995)、中央部では石川遺跡(北部第二土地区画整理事業区域内埋蔵文化財発掘調査団 1993)、南鍛冶山遺跡(藤沢市教育委員会 1994)、東部では柄沢遺跡(柄沢遺跡調査団 1991)が調査された。このように、藤沢市内では90年代になって急激に調査例が増加したが、それに伴い平成4年(1992)に藤沢市主催の『おはよう縄文』展、翌5年(1993)に湘南考古学同好会主催のシンポジウム『藤沢の縄文時代草創期を考える会』(湘南考古学同好会 1993)が開催された。

これらの湘南の草創期遺跡のうち、特に注目される遺跡としては湘南ではじめてまとまった草創期資料が得られた代官山遺跡をはじめ、多量の隆線文土器や表裏縄文土器が出土した柄沢遺跡、広範囲にわたる調査により多くの遺物集中部が検出され、住居状遺構が検出された慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡、住居状遺構をはじめ様々な遺構群が検出された南鍛冶山遺跡があげられる。また、湘南では隆線文土器の出土した遺跡が6遺跡にのぼり、神奈川県内でも隆線文土器資料の充実した地域として知られる。今回は小林謙一の編年(小林 1994)をもとに隆線文期の時期区分を試み、対応する隆線文土器と有茎(舌)尖頭器を図示した(第1~2図)。I a期には慶應キャンパスⅡ区B集中部(住居状遺構)および南鍛冶山遺跡、I b期に慶應キャンパスV区A集中部、Ⅱ期に慶應キャンパスⅠ区A~D集中部および代官山遺跡、Ⅲ期に慶應キャンパスⅢ区A・B集中部が位置づけられる。このうち土器については、基本的に時期が下るにつれ隆線の細線化、多条化がみられる。有茎(舌)尖頭器については、Ⅱ期以降小型の資料が目立ち、全体的には徐々に茎部が発達し、それに伴って

かえし部も明瞭になってくる。また、使用石材については主体が安山岩(I a・I b期)から凝灰岩(II・III期)へと変わってくるという傾向がみられる。

## 2. 主要遺跡の調査事例

### (1) 慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡(第3図)

本遺跡は、小出川右岸の高座丘陵上に位置する。標高は約35mである。大学新学部建設に伴う調査で調査面積は約12万m<sup>2</sup>におよぶ。発見された遺構や遺物は旧石器(岩宿)時代から近世におよぶが、縄文時代草創期の遺構や遺物もI～V区の各調査区から出土している。I区ではA～E集中部の5遺物集中部および円形に廻るピット群(A遺物集中部)が検出され、II区ではA～Cの3遺物集中部および住居状遺構(B遺物集中部)と炭化物集中2ヶ所(A遺物集中部)、III区でA～Eの5遺物集中部および円形に廻るピット群(C遺物集中部)が検出された(慶應義塾 1992)。また、その後2回にわたって追加調査が行われ、V区で遺物集中部(A遺物集中部)が新たに検出された(慶應義塾 1994)。本遺跡から出土した遺物は、隆線文土器が214点(19個体)で、石器類は尖頭器22点、有茎(舌)尖頭器47点、打製石斧13点、局部磨製石斧1点、削器42点、搔器1点、石錐1点、楔形石器2点、礫器13点、磨石2点、敲石5点、台石1点、石核7点、使用剥片2点、剥片435点、碎片134点、礫666点で合計1623点である。

また、本遺跡は草創期の居住活動やセツルメントを考えるうえで貴重なデータを提供する。規模や分布構造から本遺跡の遺物集中部の類型化を試みたところ、集中部の規模と密度からA類(規模大・密度中)、B類(規模中・密度高)、C類(規模小・密度高)、D類(規模大・密度低)、E類(遺物集中部外)、分布構造から1類(重層的)、2類(単層的)に区分され、遺物集中部はA1類・B1類・B2類・C2類・D2類・E2類の6類に類型化可能である。また、隆線文土器はA1類とB1類で出土しており、石器組成を検討するとD2類やE2類は狩猟具の比率が高く、A1類やB1類は剥片・碎片の比率が高いという傾向がみられた。このような検討の結果、A1類はピット群を伴う居住地(I区A～D遺物集中部、III区C・D遺物集中部)、B1類は住居状遺構も伴う小規模の居住地(II区B遺物集中部、III区A・B遺物集中部、V区A遺物集中部)、B2類は短期的居住地あるいは野営地(II区A遺物集中部)、C2類は石器製作址(II区C遺物集中部)、D2類は狩猟採集の一時的野営地(III区E遺物集中部、III区西側集中部、東側集中部)、E2類は狩猟地(遺物集中部外)という性格づけを行った(桜井 1993)。

### (2) 南鍛冶山遺跡(第4図)

本遺跡は引地川右岸の相模野台地上に位置している。標高は約35m、現河床との比高差は約25mである。本遺跡は奈良・平安時代の集落址として知られているが、旧石器(岩宿)時代や縄文時代の遺構や遺物も出土している。草創期の1号遺物集中部は遺跡の南東部にあたり、南東に傾斜する緩斜面上に位置し、遺構や遺物は28mの等高線に沿って約25m×10mの範囲に分布している。本集中部からは住居状遺構2軒、配石遺構2基、炭化物集中2ヶ所、碎片集中1ヶ所、土器集中1ヶ所などが検出されている。このうち、住居状遺構は2軒とも竪穴住居状の遺構であり、1号住居状遺構は不整構円形で

2基の柱穴を伴い、2号住居状遺構は楕円形で炉址状の落込みと5本の柱穴を伴っている。2号住居状遺構から隆線文土器が出土している。また、1号住居状遺構埋没後、1号配石遺構が形成されていることや礫の接合状況から1号住居状遺構は他の遺構群とは時期を異にしていると考えられる。本遺跡から出土した遺物は、隆線文土器が67点(3個体)、石器類は尖頭器3点、有茎(舌)尖頭器17点、打製石斧8点、削器1点、楔形石器2点、礫器1点、磨石2点、敲石1点、台石1点、石核1点、剥片646点、碎片400点、礫138点の合計1291点である。

本遺物集中部で注目されるのは、1号住居状遺構を除いた同時期と思われる遺構群の配置である。各遺構の配置をみると、1・2号配石遺構が本集中部のほぼ中央に位置し、その北側と西側に炭化物集中、北東部に碎片集中、東側約10mに土器集中が存在し、2号住居状遺構は南西方向約10mに位置している。このうち1・2号配石遺構は礫が弧状に配列され、内側には比較的大型の礫が分布し、隆線文土器も若干出土していることから、テント状の作業小屋に関連する施設であった可能性がある。炭化物集中については2号炭化物集中部で直下に径30cm、深さ20cm程度の小土坑が多数重なりあって検出され、覆土中に比較的大型の炭化物がみられたことから燃料材の廃棄した遺構と考えられる。碎片集中については、尖頭器類に用いられている安山岩製を主体とする微細碎片が集中していることから、この地点が尖頭器類の製作が行われた地点あるいは製作の際に飛び散った碎片をまとめて廃棄した地点であると考えられる。土器集中については、集中に粗密があり小破片のみであること、周囲から遺物が出土していないことから土器の廃棄場所と考えられる。このように、本遺物集中部は、遺構群分布から隆線文期の居住活動が推定できることが大きな特徴であり、「居住空間(住居状遺構)」「作業空間(1・2号配石遺構周辺)」「尖頭器製作あるいは碎片廃棄空間(碎片集中)」「土器廃棄空間(土器集中)」「燃料材廃棄空間(炭化物集中)」が想定でき、当時の居住地の空間利用に一定の規則があったことを示している。

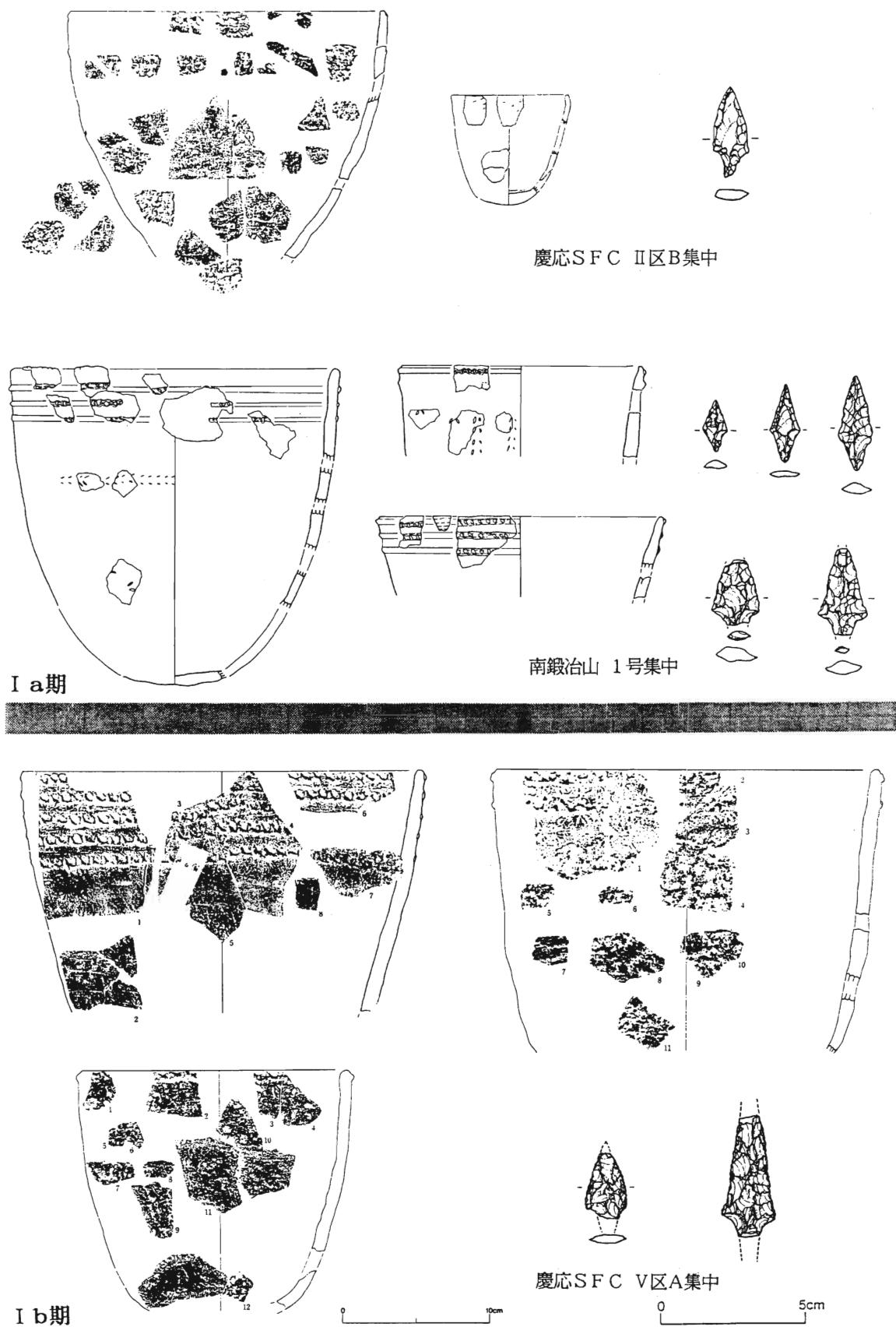
### 3. 隆線文期の居住活動とセツルメント

湘南では草創期のうち隆線文期の遺跡が特に集中しており、住居状遺構などの遺構群も複数検出されている。草創期の住居状遺構については、関東地方では埼玉県宮林遺跡、東京都前田耕地遺跡、もみじ山遺跡、神奈川県横浜市花見山遺跡、相模原市勝坂遺跡などが著名であるが、全国的にみても検出例はまだ少ない。遺構の大きさや形状も様々であり、住居の構造も一定していない。また、隆線文期には複数の住居からなる集落は営まれないこと、土器の出土量は増加するものの植物質食料の利用と関連する石皿や磨石の出土量は少ないと定住性はそれほど高くはないといえる。しかしながら、既に述べたように旧石器(岩宿)時代とは異なり、遺構の検出例が増加し、遺跡内の廃棄空間が存在するなど遺跡の空間利用に規則性がみられる。遺物集中部のあり方にもバラエティがみられ、この時期に「拠点的居住地」、「居住地」、「野営地」、「狩猟場」などで構成されるセツルメントシステムが形成されていた可能性が高い。このことは、遊動的で旧石器(岩宿)時代の延長として捉えられていた草創期の居住活動が一定の領域を占有したより定着性の強いもので

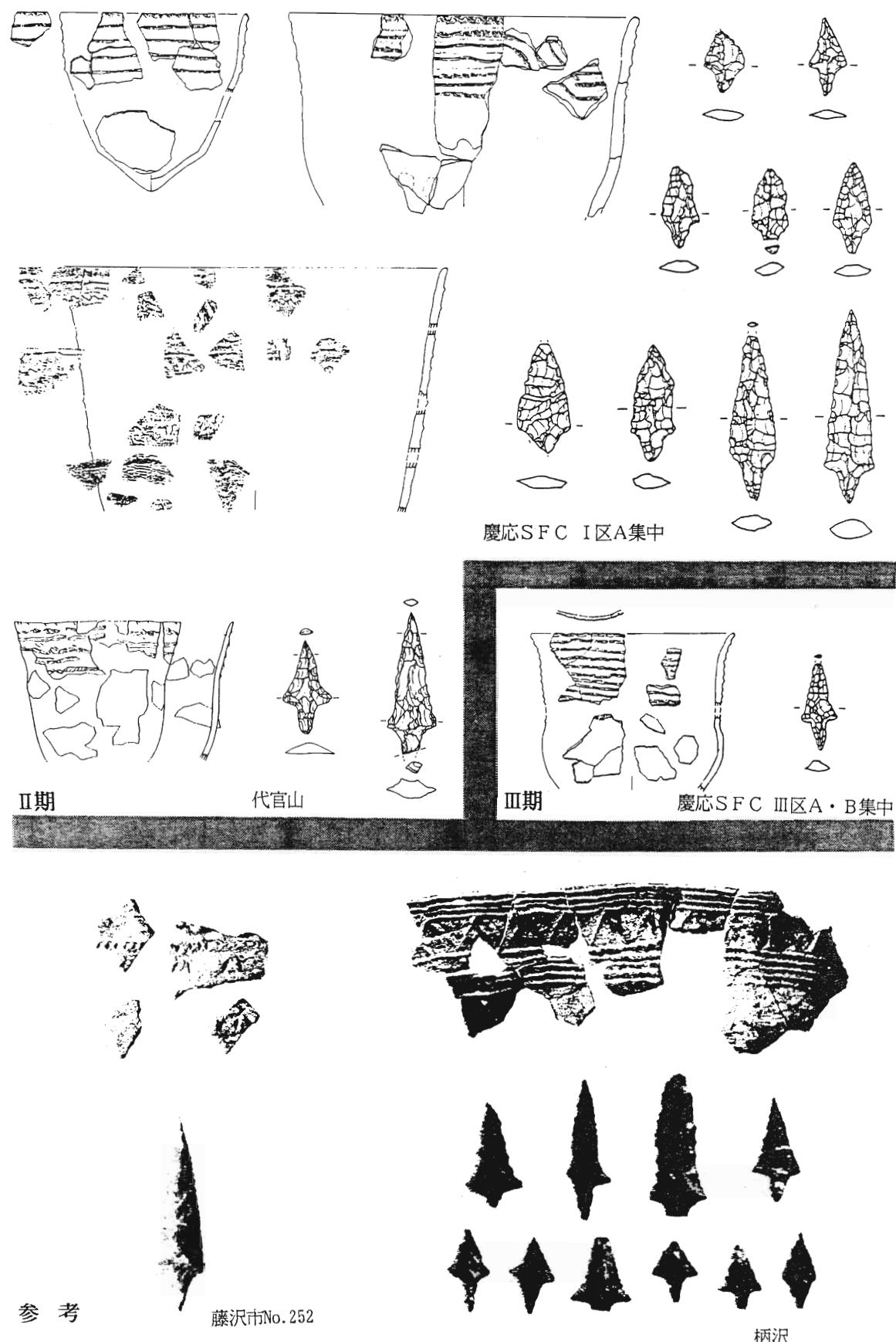
あつたことを示している。遺跡の立地をみても、旧石器(岩宿)時代には相模野台地の比較的小河川沿って分布していた遺跡群が、隆線文期になるとより規模の大きな河川沿いや丘陵地に遺跡が立地するという傾向がみられ、この時期の集団が丘陵地に進出していったことを示す。このことは、領域の成立とともに、水産資源の利用など生業の問題や河川沿いの移動や交易活動についての議論の必要性を提示するものである。いずれにしろ、草創期研究は遺物中心の研究から遺跡論や領域論へと発展させてゆくことが急務である。

### 参考文献

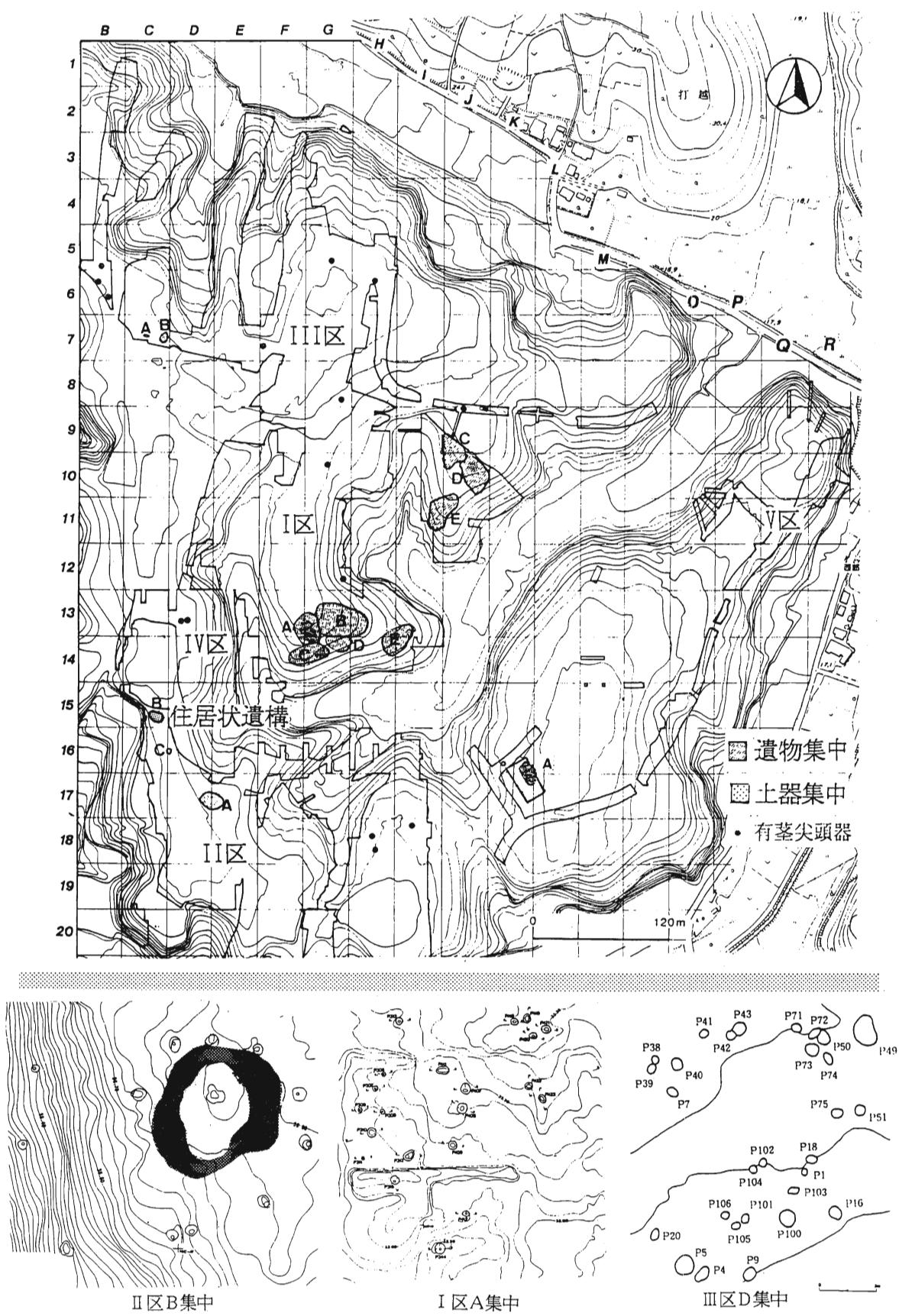
- 雨宮瑞生 1993 「研究展望・縄文時代の定住生活の出現および定住社会に関する史的諸問題」『古文化談叢』第29集、九州考古学研究会
- 石名坂遺跡発掘調査団 1979 『石名坂遺跡』
- 稻田孝司 1986 「縄文文化の形成」『岩波講座日本考古学 6 变化と晩期』岩波書店
- 今田遺跡発掘調査団 1992 『今田遺跡発掘調査報告書』
- 遠藤土地改良区内遺跡発掘調査団 1994 「藤沢市No.452遺跡」『湘南考古学同好会会報』52号
- 岡田団地内遺跡調査団 1987 『県営岡田団地内遺跡』
- 樋原考古学研究所(編) 1994 『一万年前を掘る』吉川弘文館
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1986 『代官山遺跡』
- 柄沢遺跡調査団 1991 「柄沢遺跡」『湘南考古学同好会会報』41号
- 旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクトチーム 1994 「旧石器時代終末における石器群の諸問題」『神奈川県の考古学の諸問題』神奈川県立埋蔵文化財センター
- 栗島義明 1995 「縄文文化の成立と技術革新」戸沢充則編『縄文人の時代』新泉社
- 慶應義塾 1992 『慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡 第2巻岩宿時代・縄文時代I部』
- 慶應義塾 1994 『慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡 情報基盤センター(仮称)』
- 小林謙一 1994 「土器について」『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書 第1巻縄文時代草創期』
- 桜井準也 1993a 「縄文時代草創期前半の有茎尖頭器の平面分布について」『慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻総論』慶應義塾
- 桜井準也 1993b 「縄文時代草創期前半の遺跡の在り方—慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡の再検討ー」『藤沢の縄文時代草創期を考える会 発表要旨』湘南考古学同好会
- 佐藤宏之 1992 「北方系削片系細石器石器群と定住化仮説」『法政大学大学院紀要』29号
- 湘南考古学同好会 1993 『藤沢の縄文時代草創期を考える会資料・発表要旨』
- 白石浩之 1992 「有茎尖頭器の分布とその問題点—神奈川県を中心としてー」『神奈川考古』28号
- 白石浩之 1994 「縄文時代草創期の集団構造への接近」『縄文時代』5号
- 諏訪間順 1988 「相模野台地における先土器時代石器群について」『神奈川考古』24号
- 高倉枯藪遺跡調査団 1993 「藤沢市No.252遺跡」『湘南考古学同好会会報』49号
- 高倉滝ノ上遺跡調査団 1989 『高倉滝ノ上遺跡』
- 茅ヶ崎市 1980 『茅ヶ崎市史 考古民俗編』
- 茅ヶ崎市 1981 『茅ヶ崎市史 4通史編』
- 茅ヶ崎市 1987 『写真集茅ヶ崎 きのうきょう』
- 中田英・栗原伸好・井関文明・鈴木廣一郎 1995 「用田バイパス関連遺跡群」『湘南考古学同好会会報』56号
- 西田正規 1986 『定住革命—遊動と定住の人類史』新曜社
- 藤沢市教育委員会 1992 『藤沢市文化財調査報告書 第28集 縄文時代草創期の藤沢』
- 藤沢市教育委員会 1994 『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書 第1巻 縄文時代草創期』
- 藤沢市西部土地開発区域内埋蔵文化財発掘調査団 1983 『西部215地点遺跡』
- 藤沢市西部土地開発区域内埋蔵文化財発掘調査団 1991 『西部209地点遺跡・西部215地点遺跡・西部225地点遺跡』
- 藤沢市西部土地開発区域内埋蔵文化財発掘調査団 1992 『西部212地点遺跡』
- 藤沢市No.424遺跡発掘調査団 1995 「藤沢市No.424遺跡」『湘南考古学同好会会報』56号
- 藤沢市No.455遺跡発掘調査団 1995 「藤沢市No.455(下土棚)遺跡」『湘南考古学同好会会報』56号
- 北部第二(二地区)土地区画整理事業区域内埋蔵文化財発掘調査団 1993 『石川遺跡』
- 松田光太郎 1995 「芹沢・臼久保A遺跡」『第6回茅ヶ崎市遺跡調査発表会発表要旨』茅ヶ崎市教育委員会



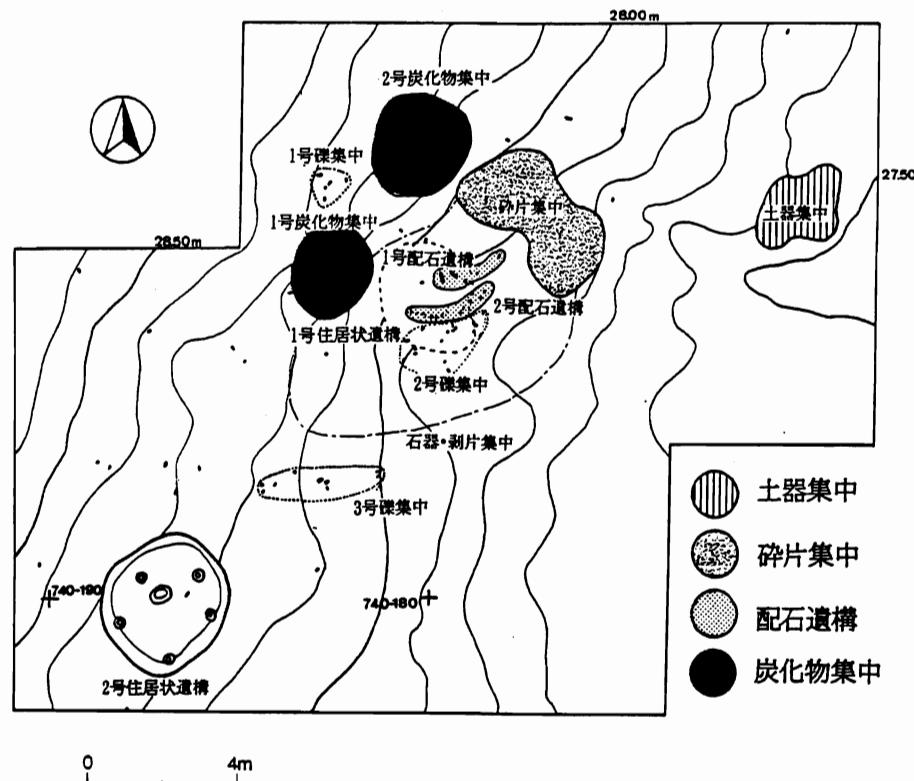
第1図 湘南地域出土の陸線文土器・有茎尖頭器(I期)



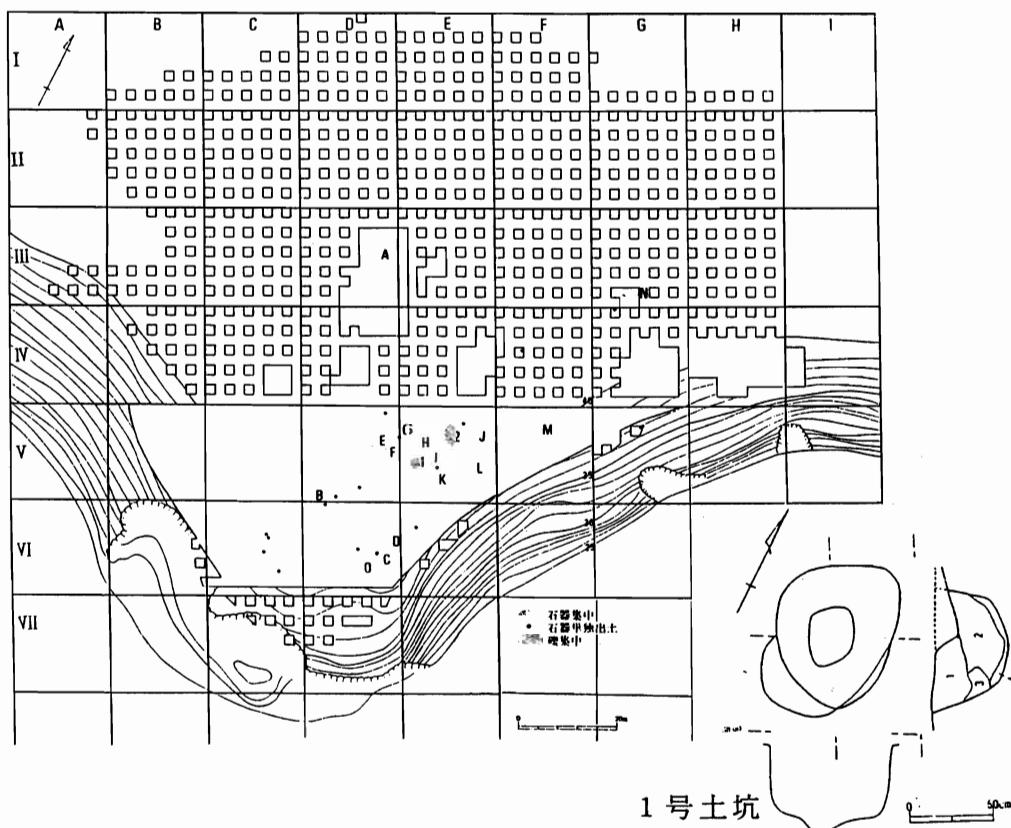
第2図 湘南地域出土の隆線文土器・有茎尖頭器(II・III期)



第3図 藤沢市慶應SFC遺跡検出遺構



第4図 藤沢市南鍛冶山遺跡検出遺構



第5図 藤沢市代官山遺跡検出遺構

## いわゆる隆線文土器以前の様相－県央－

村澤正弘

### 1. プロローグーいわゆる隆線文土器以前の土器の発見

1970年2月、旧石器時代研究史上有名な「月見野遺跡」が調査された翌年、相模考古学研究会6名のメンバーによって行われた相模野第149遺跡の調査で、ローム層中から土器が発見され、さらに尖頭器と共に伴することが確認された。土器と尖頭器の共伴関係については1956年に行われた新潟県本ノ木遺跡の調査以来、学会をリードする山内清男・芹沢長介両氏間でその是非が問われており、重大な発見であった。にもかかわらず、この事実は調査にかかわった一部の人間しか知ることがなかった。この土器が一躍脚光を浴びることになるのは、1977年に行われた寺尾遺跡の調査で非常によく似た土器が発見されたことである。一般に周知されたのは1980年に刊行された『寺尾遺跡』の調査報告書上であり、遺物図版に参考資料として写真が掲載されたことである。

寺尾遺跡から出土した土器は、その特徴的な口辺部の隆帯に縄の圧痕や刺突が施されるもので、新潟県室谷洞窟から出土した口辺部を有段状にした土器との関連が指摘され、押圧縄文系土器群に含まれるものと考えられた。当時の研究にあっては至極当然のなりゆきであった。さらに共伴する多量の尖頭器は、将に「本ノ木論争」に決着をつけるかのごときであった。石器の推移から逆行する石器内容に対して、突如として出現した尖頭器文化の末路の一形態と推測された。しかしながら1979年から調査が始まり、1986年に報告書が刊行された上野遺跡では富士黒土層下部から隆線文土器の文化層が発見され、その下位のローム層中より土器を伴う尖頭器類が出土した。さらに驚くべきことにこの文化層には細石刃が伴い、削片系の細石刃石核まで出土したのである。

このような状況の中で、寺尾遺跡の位置づけは層位的問題や石器の変遷、相模野第149遺跡の土器に共伴する石器群のありかたから考えて押圧縄文系土器群と考えるには無理があり、別個の土器群で、この土器は従来いわれている隆線文土器より古い段階のものであることが指摘された。その後、相模野台地に限っても1987年の長堀北遺跡や1990年の勝坂遺跡において上野遺跡の成果を裏付ける発見がなされ、隆線文系土器群以前には土器や細石器を伴う尖頭器文化が存在することは、もはや搖るがすことのできない事実として認識されるに及んだのである。

### 2. 土器－隆線文土器とは異なる

隆線文土器の文様作出法の定義を「粘土の紐をはりつけたり、籠状工具の移動によってミミズばれ状の隆起部をつくり出したりして器面を飾る。」(1983 日本考古学小辞典)と捉えた場合、いわゆる隆線文土器以前とされる一連の土器は、やはり隆線文土器から離脱する存在である。

この土器群に位置づけられる土器は、県内で5箇所から発見されている。相模原市勝坂遺跡、大和市上野遺跡、同市相模野第149遺跡、綾瀬市寺尾遺跡、清川村北原遺跡である。このうち土器の旋文がわかるものは相模野第149遺跡と寺尾遺跡である。これらの土器は後出する隆線文土器の隆線施文と同様に、口縁部に幅広隆帯を貼付しているかのようにみられる。しかし、ここが大きく異なる重要なポ

イントである。土器に隆線を飾りつけるという2次的行為によるものではなく、土器成形の一環として作出したものである。この隆帯もどきものは土器つくり時に用意された粘土帯で、この粘土帯は土器成形の口辺部つくりの際にできたものである。たとえば早期初頭の井草式土器に見られる肥厚する口唇部つくりと同じ考え方である。両遺跡共に粘土帯によって作出された段には押圧痕もしくは刺突がみられるが、寺尾遺跡はその隆帯もどきを一つ文様帯として捉えている。だから一つの文様帯に複数の異なる施文があっても不思議ではないのである。一方相模野第149遺跡の刺突は文様帯を区画するための刺突列に代わっているのである。この2つの非常によく似た土器の間には大きなギャップがあるのである。また、同一個体の中で第5図7と8の部分が混在する相模野第149遺跡の土器は、隆帯もどき作出法を如実に語っているのかもしれない。また、器厚は約0.8cmで厚みがあり、胎土中には植物繊維もしくは獸毛が混入されていることも大きな特徴である。

### 3. 石 器—神子柴・長者久保文化との関連

神子柴・長者久保文化を「最大幅が基部寄りにある扁平長大の大形尖頭器や狭長で断面三角形を呈する重量感のある大形石斧を持つ石器群」とすれば、相模野台地における隆線文土器以前の土器文化は神子柴・長者久保文化の中にあると考えるべきである。

時間的変遷を考える素材として抽象的な文様をもつ土器は良好な遺物であり、実用的な石器は不適な遺物であることは認めるものの、ある地域内における集積した事例から得られた特質を検討することによってその推移を推定することは可能である。相模野台地における各遺跡の石器群を遠望すると時間的差異が考えられる。尖頭器類については寺尾遺跡に見られる第6図12・15・16の3タイプが基本型である。基部と先端部の判別が明らかになる程、新しい様相を示しているようである。有舌尖頭器はその最たるもので、第6図2のように明らかに抉りを有し長身のものは隆線文土器に伴うものといえる。石斧は寺尾遺跡に見られる第7図6～8の3タイプが基本型である。第7図1～3のように片面に自然面を大きく残す基部鋭端のものは隆線文土器に特徴的である。細石刃石核については、削片系のものに限られている。遺跡によって有無がみられる。細石器があるからといって古いわけではない。勝坂遺跡は吉岡C区段階に、上野遺跡第2文化層は寺尾前後に位置するように思える。今のところ寺尾段階以降に相模野台地では土器が出現しており、土器が神子柴・長者久保文化や削片系細石器文化とともに渡来ということではないかもしれない。

#### 参考文献(図版等借用分 刊行年代順)

- 寺尾遺跡『寺尾遺跡』神奈川県教育委員会1980
- 深見諏訪山遺跡『深見諏訪山遺跡』大和市教育委員会1983
- 栗原中丸遺跡『栗原中丸遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター1984
- 上野遺跡『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』大和市教育委員会1986、『大和市史7』大和市1986、『神奈川県大和市上野遺跡第2地点発掘調査報告書』同調査団1984
- 相模野第149遺跡『相模野第149遺跡』大和市教育委員会1989
- 長堀北遺跡『長堀北遺跡-資料編』大和市教育委員会1990、『長堀北遺跡-本文編』大和市教育委員会1991
- 勝坂遺跡『勝坂遺跡第45次調査』相模原市教育委員会1993
- 吉岡遺跡群「年報10」・「年報11」神奈川県立埋蔵文化財センター1991・1992、「神奈川県綾瀬市吉岡遺跡群における神子柴・長者久保系石器群の終末とその様相」日本考古学協会第58回総会研究発表要旨1992 白石浩之・砂田佳弘両氏のご好意によりトレス原図を借用した。

## 主要遺跡の概要一覧(調査年代順)

### ●相模野No. 1 4 9 遺跡

所在地：大和市つきみ野7-17（個人住宅地）

調査主体：相模考古学研究会

調査期間：1970. 2. 21-23

調査面積：約40m<sup>2</sup>

遺跡立地：境川支流の目黒川東岸、台地縁辺部に位置し、目黒川に向かって緩やかに傾斜した平坦部。標高約80m、目黒川との比高差は約15m。

出土層位：L1S層上部

遺構：なし

遺物土器：計30片 隆起線文土器以前

遺物石器：計461点 有舌尖頭器1 尖頭器4 楊器1 削器3 石斧？1 加工痕のある剥片13剥片・碎片438(大半は尖頭器調剥片)

調査面積：約300m<sup>2</sup>

遺跡立地：境川西岸、台地縁辺部の平坦部。標高約67m、境川との比高差は約17m。

出土層位：L1S層

遺構：なし

遺物土器：なし

遺物石器：計8点 尖頭器3 石核1 剥片4

### ●大和市長堀北遺跡

所在地：大和市下鶴間2570-4（西松建設技術研究所）

調査主体：相武考古学研究所

調査期間：1987. 8. 21-12. 3

調査面積：約1000m<sup>2</sup>

遺跡立地：境川西岸、台地崖線部上から平坦部。標高約70m、境川との比高差約20m。

第1文化層

出土層位：H-A漸移-L1S層上部

遺構：集石4

遺物土器：計18片(6個体) 隆起線文土器

遺物石器：計74点 有舌尖頭器1 尖頭器1 石鐵1 磬1 打製石斧2 使用痕を有する剥片2 剥片42碎片2

第2文化層

出土層位：L1S層中位

遺構：礫群4

遺物土器：なし

遺物石器：計884点 尖頭器13打製石斧1 細石刃52細石刃石核2(原形1) 削片11削器1 楔形石器1 加工痕のある剥片3 剥片326碎片474

### ●綾瀬市寺尾遺跡

所在地：綾瀬市寺尾南1-4（県立綾瀬高校）

調査主体：神奈川県教育委員会

調査期間：1977. 7. 18-12. 15

調査面積：約1200m<sup>2</sup>

遺跡立地：比留川東岸、南北にのびる座間丘陵尾根に位置する。尾根の東は穏やかに傾斜し、西は比留川にのぞむ急斜面となる。標高57.3m、比留川との比高は15m。

出土層位：L1S層

遺構：なし

遺物土器：計46片 隆起線文土器以前

遺物石器：計1189点 尖頭器58石斧6 楊器1 削器4 敷石1 舟底形石器1 ターリング1 加工痕のある剥片3 使用痕のある剥片4 石核1 剥片91碎片1005(細石刃石核調整剥片1 細石刃12)>

### ●月見野遺跡群上野遺跡第1地点・第2地点

所在地：大和市つきみ野5-3（市営上野団地・マンション）

調査主体：大和市教育委員会・月見野上野第2地点遺跡調査団

調査期間：1地点1979. 7. 16-1981. 7. 27(断) 2地点1981. 8. 1-9. 10

調査面積：1地点約12000m<sup>2</sup> 2地点1440m<sup>2</sup>

遺跡立地：境川支流の目黒川西岸、台地縁辺部で目黒川に向かって緩やかに傾斜する平坦部。標高約78m、目黒川との比高差は約15m。

第1文化層

出土層位：FB層

遺構：なし

遺物土器：計345片(9個体) 隆起線文土器

遺物石器：計231点 有舌尖頭器4 尖頭器8(未製品3) 削器6 打製石斧5(未製品2) 二次加工を有する剥片1 石鐵1 楔錐器1 砕石？1 剥片204

第2文化層

出土層位：L1S層

遺構：礫群4

遺物土器：計24片 隆起線文土器以前

遺物石器：計1698点 尖頭器10細石刃18削器2 楊器2 打製石斧1 磨製石斧1 敷石1 二次加工を有する剥片2 剥片2 細石刃石核2 石核1 剥片1651(カイ形石器5)

### ●座間市栗原中丸遺跡

所在地：座間市栗原2487（県立栗原高校）

調査主体：神奈川県教育委員会

調査期間：1980. 10. 1-1982. 4. 30

調査面積：約12000m<sup>2</sup>

遺跡立地：相模川支流の目久尻川の最上流域東岸、台地縁辺部で谷に向かって緩やかに傾斜する平坦部。標高約70m、谷との比高差は約13m。

出土層位：L1S層上面

遺構：礫群1

遺物土器：なし

遺物石器：計174点 尖頭器20削器4 楔錐器1 加工痕のある剥片1 碎片148

### ●綾瀬市吉岡遺跡群

所在地：綾瀬市吉岡858ほか(綾瀬浄水場)

調査主体：神奈川県立埋蔵文化財センター

調査期間：A区1990. 4. 2-1993. 3. 31 C区1990. 4. 2-1993. 3. 31

調査面積：A区30860m<sup>2</sup> C区36000m<sup>2</sup>

遺跡立地：相模川支流目久尻川中流左岸、高座丘陵北端部に位置する。遺跡群は6箇所の樹枝状の丘陵によって形成され、A区は丘陵付け根の縁辺部。C区は穏やかに傾斜する平坦部。標高は丘陵上40m、谷部20m。

A区

出土層位：FB層下-ローム漸移層

遺構：-

遺物土器：なし

遺物石器：計約800点 打製石斧8 局部磨製石斧5 打製石斧8(未製品等) 尖頭器24(未製品11) 削器11 砕石1 加工痕を有する剥片2 加工痕を有する礫1 残核1 剥片・碎片752(磨製石斧調整剥片・碎片35) 打製石斧調整剥片・碎片534 尖頭器作出剥片119) 1992. 2現在

C区

出土層位：FB層-L1S層上

遺構：-

遺物土器：なし

遺物石器：計約1000点 尖頭器155 石鐵2 局部磨製石斧1 削器1 楔錐器1 ターリング1 敷石1 剥片・碎片約800(尖頭器作出剥片・碎片) 1992. 2現在

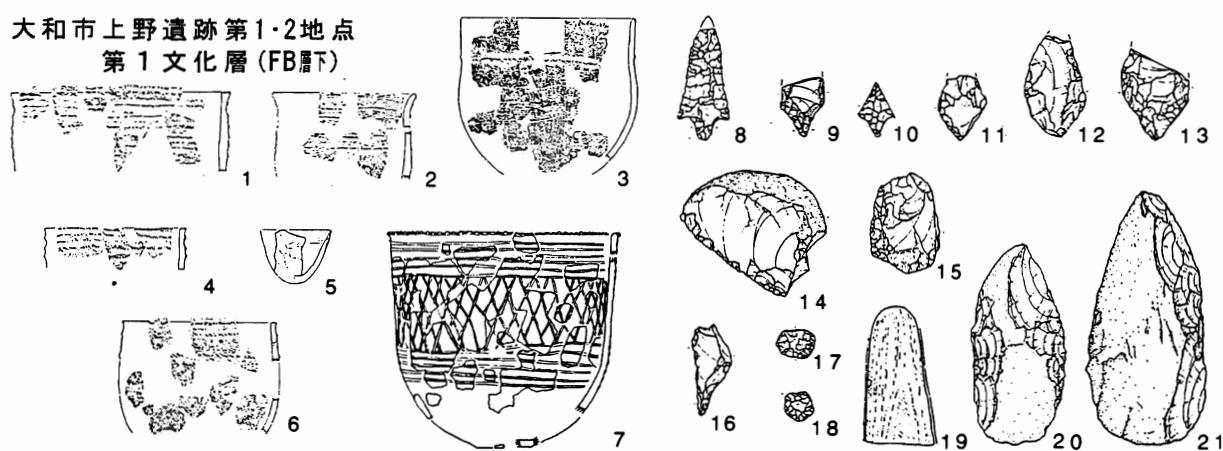
### ●大和市深見諭訪山遺跡

所在地：大和市深見2025ほか(県立大和東高校進入路)

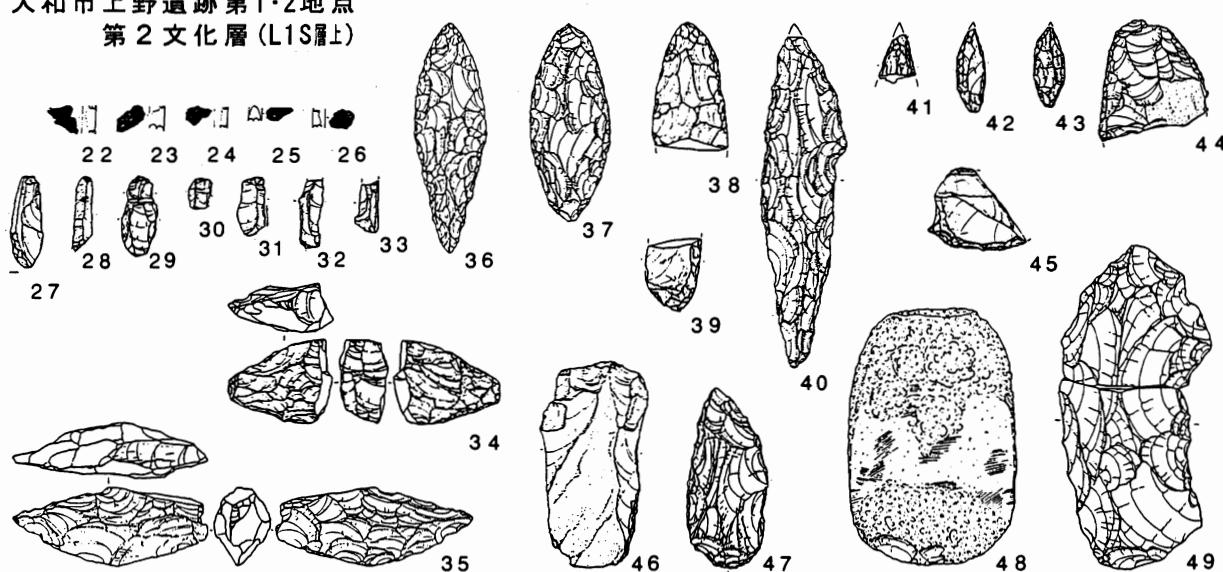
調査主体：大和市教育委員会

調査期間：1981. 11. 14-12. 10

大和市上野遺跡第1・2地点  
第1文化層(FB下)



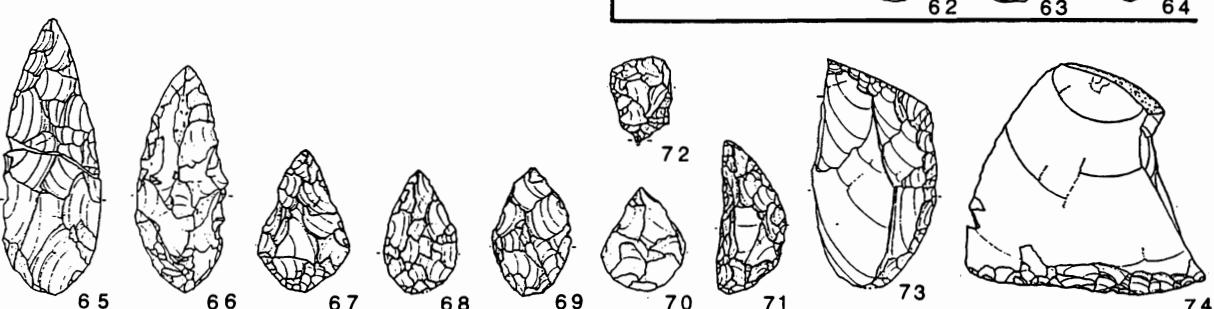
大和市上野遺跡第1・2地点  
第2文化層(L1S層上)



大和市相模野第149遺跡  
L1S上部文化層



座間市栗原中丸遺跡  
第1文化層(L1S層上)



大和市深見諏訪山遺跡

L1S層

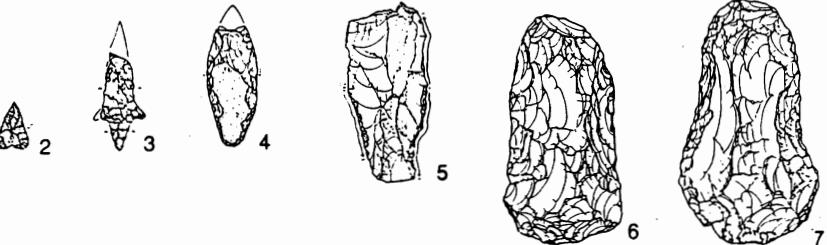


第1図 遺跡別遺物組成図1(復元土器1/8、土器片1/6、石器1/3)

1-7, 22-28, 50-54土器, 8-10, 55有舌尖頭器, 11-13, 38-43, 58-59, 62-64, 65-71尖頭器, 14-15, 44-46, 59, 73-74削器, 16, 72撲錐器,  
17-18指状撲器, 19磁石?, 20-21, 49, 61打製石斧, 27-33磨石刃, 34-35磨石刃石核, 47, 60撲器, 48磨製石斧

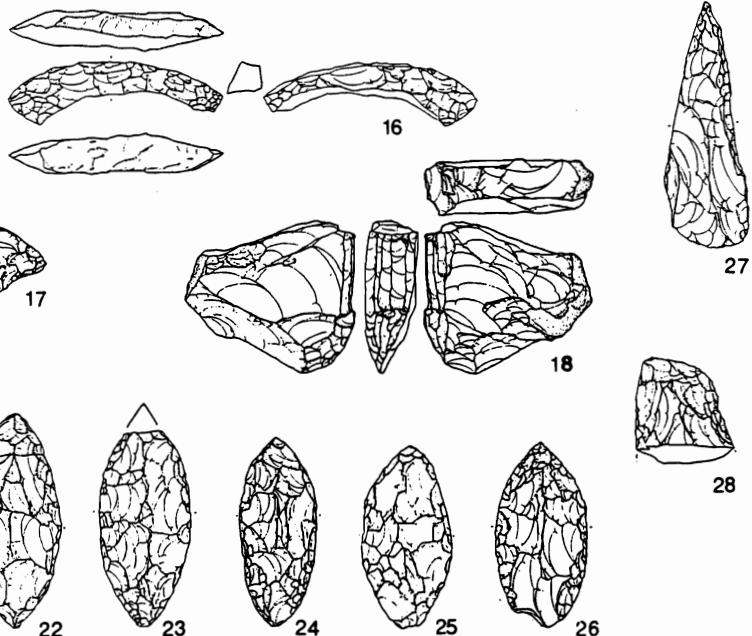
## 大和市長堀北遺跡

第1文化層(FB-L1S層上)



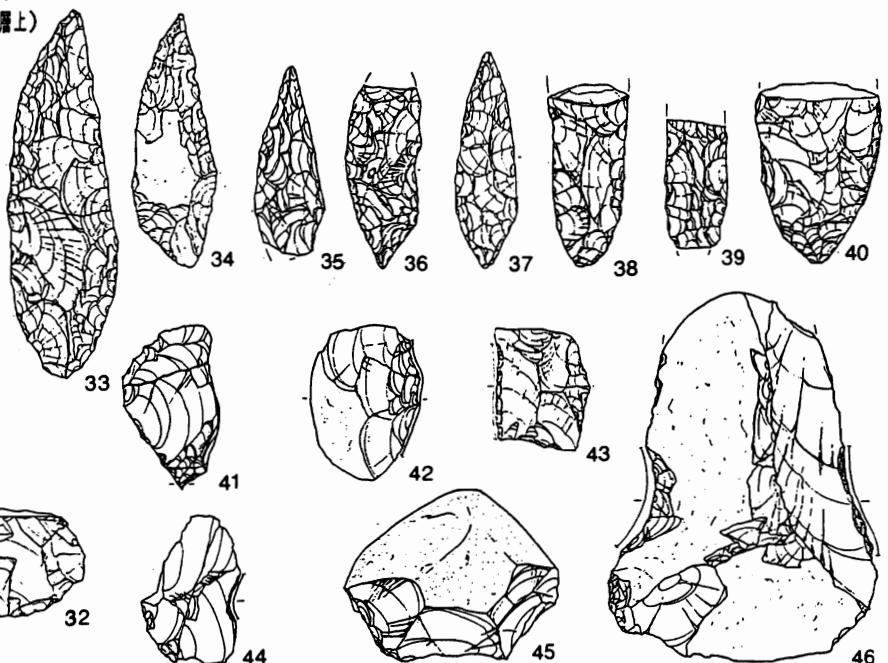
## 大和市長堀北遺跡

第2文化層(L1S層中)



## 相模原市勝坂遺跡第45次

縄文草創期(口-4層-L1S層上)

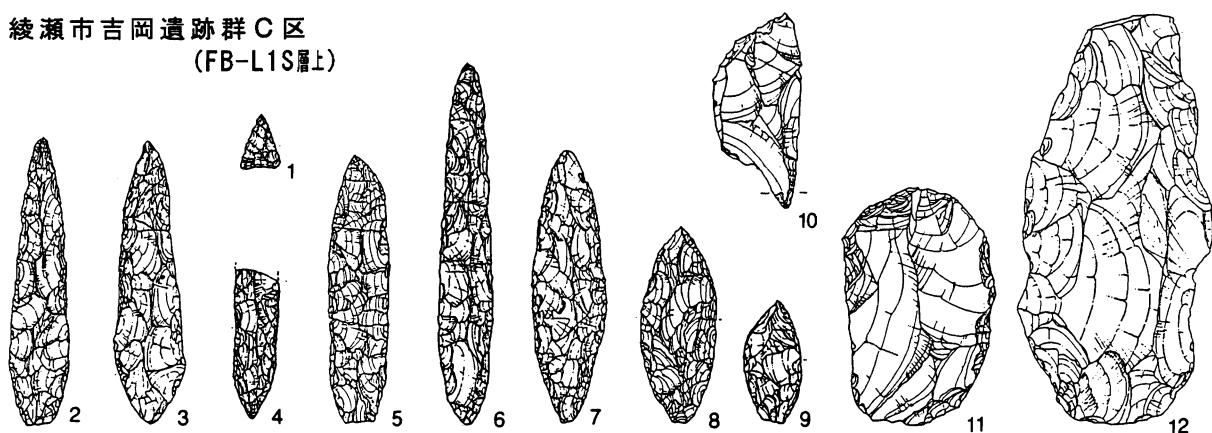


第2図 遺跡別遺物組成図2(土器片1/6, 石器1/3)

1, 29-31土器、2石鏃、3有舌尖頭器、4, 19-26, 33-40尖頭器、5, 27, 42-44削器、6-7, 28, 46打製石斧、8-15細石刃、16削片、  
17-18, 32細石刃石核、41撲錐器、45砾器

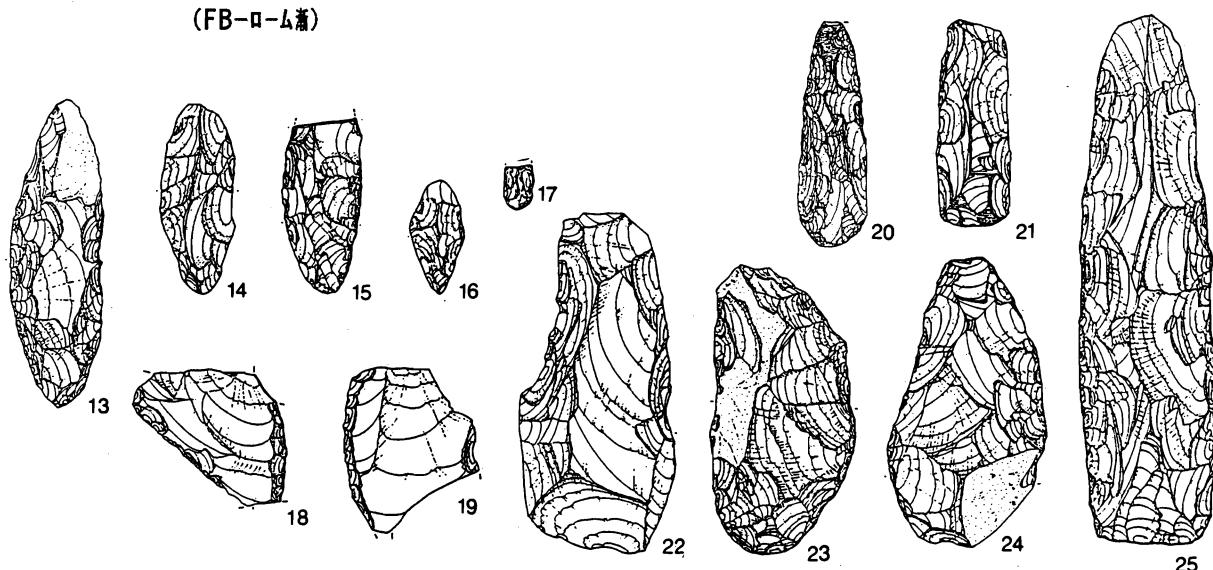
綾瀬市吉岡遺跡群 C 区

(FB-L1S層上)



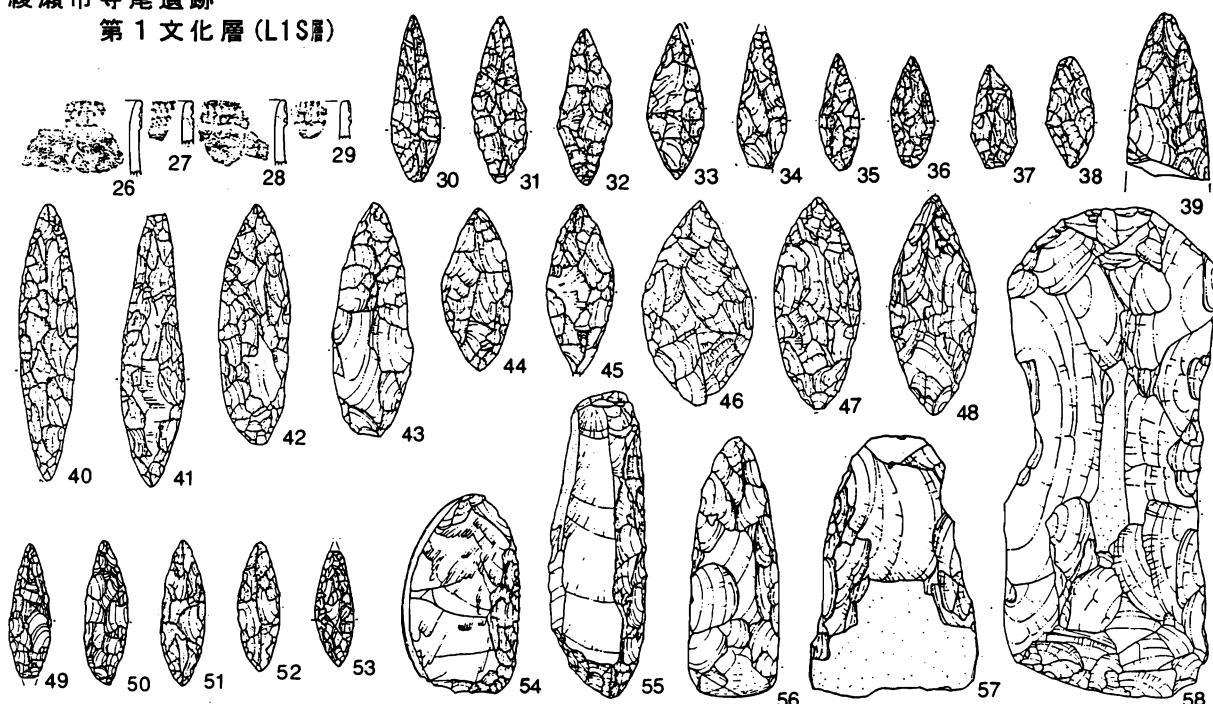
綾瀬市吉岡遺跡群 A 区

(FB-ローム層)



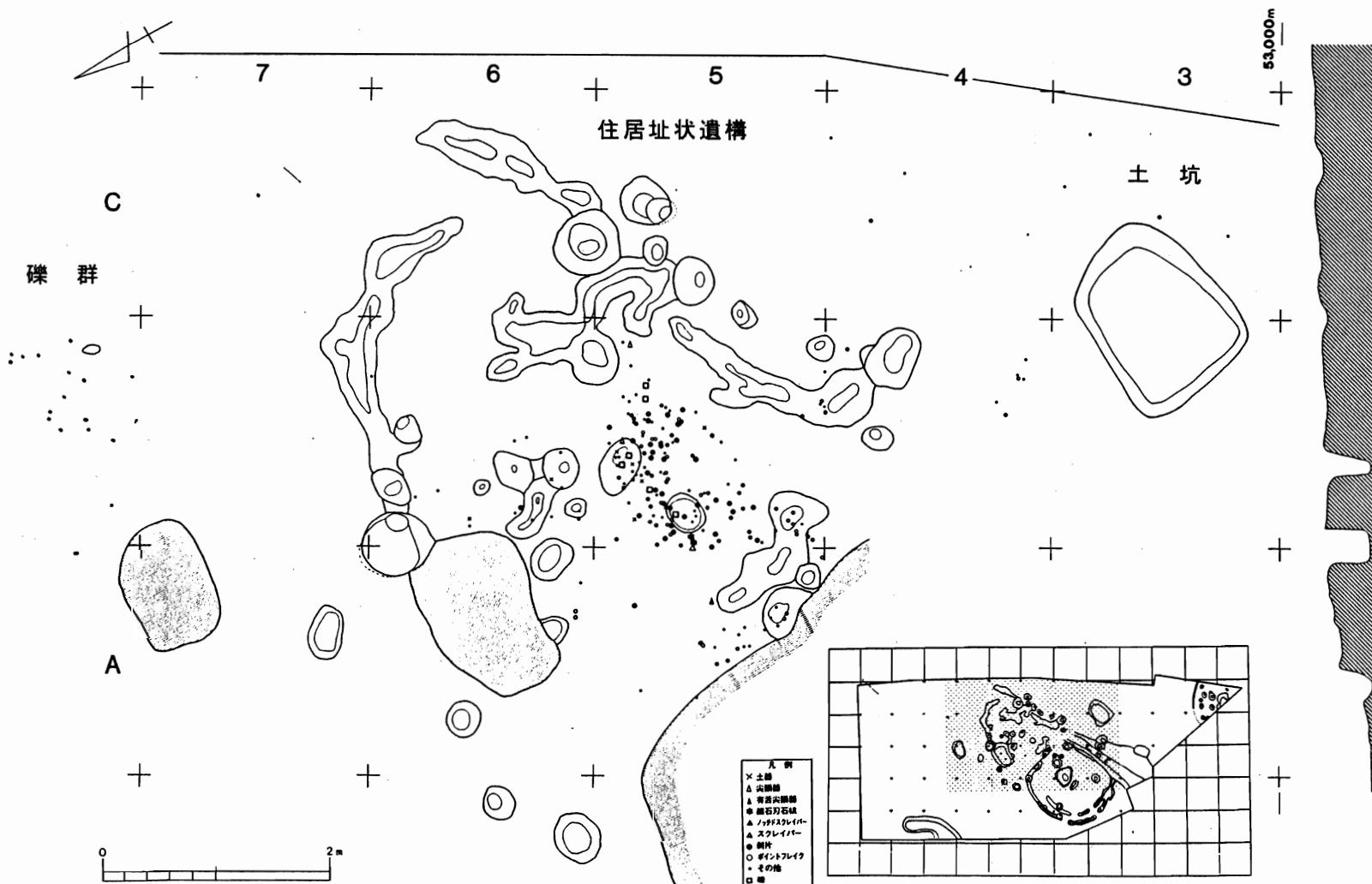
綾瀬市寺尾遺跡

第1文化層 (L1S層)

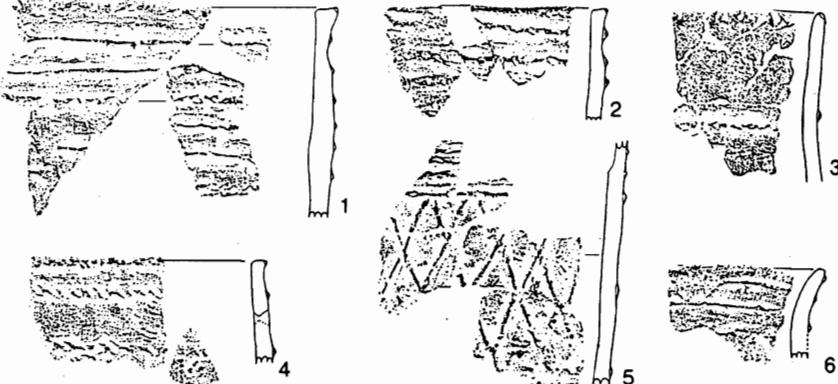
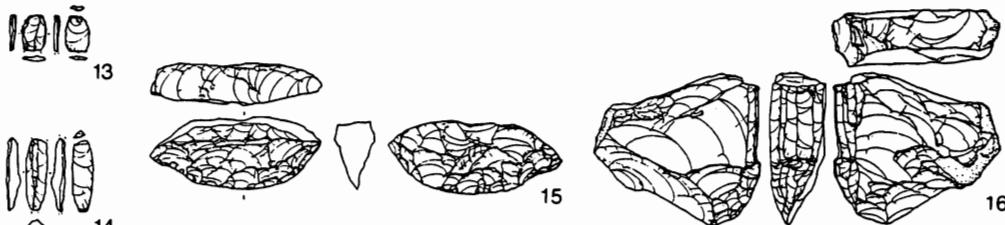


第3図 遺跡別遺物組成図3 (土器片1/6, 石器1/3)

1石錐、2-9, 13-17, 30-53尖頭器、10揉錐器、11, 18-19, 54削器、12, 20-25, 57-58打製石斧、26-29土器、55撫器、56磨製石斧

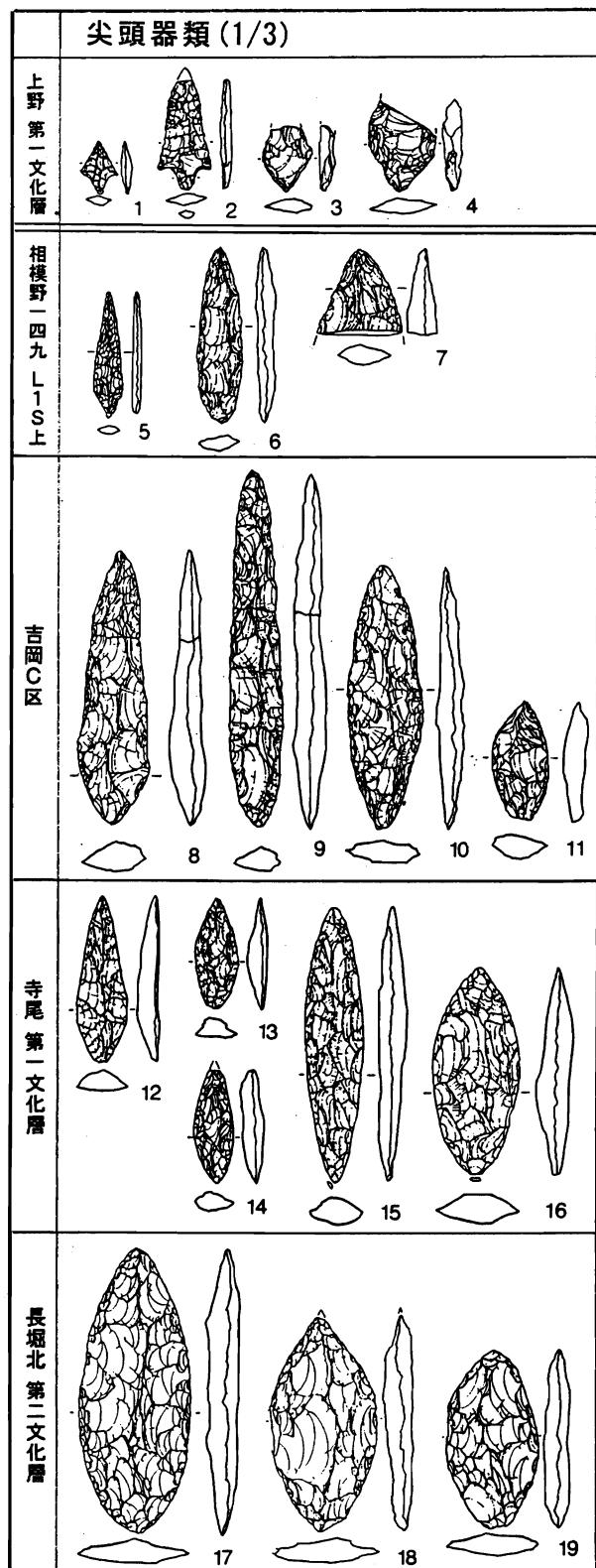


第4図 繩文草創期の遺構(勝坂遺跡第45次)

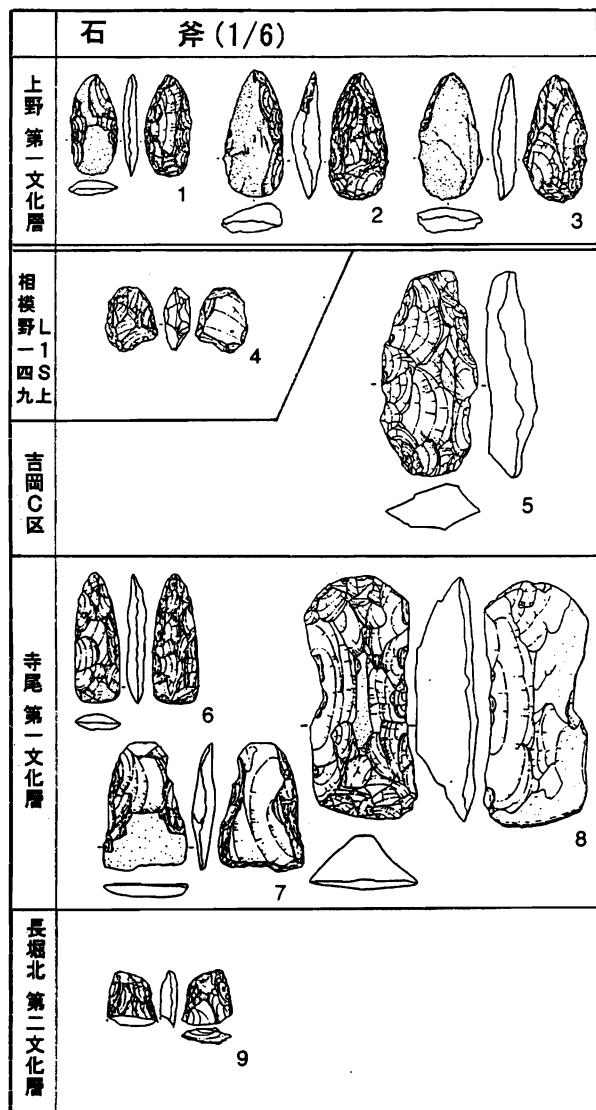
	土 器 (1/3)	細石器 (1/3)
上野 第一文化層		
相模野一四九 L1S上		
吉岡C区		
寺尾 第一文化層		
長堀北 第二文化層		

第5図 遺物器種別変遷図1(土器、細石器)

県央で今まで調査された遺跡を文化層ごとにまとめ、推移を序列化したものである(第5~7図)。



第6図 遺物器種別変遷図2(尖頭器類)



第7図 遺物器種別変遷図3(石斧)

## 神奈川県西部の現状

諫訪間伸

### 1. 概観

神奈川県西部とは、相模川の西側の県北山間部(城山町、清川村)、丹沢山麓及び大磯丘陵(厚木市、伊勢原市、平塚市、秦野市、大磯町)、箱根山麓(小田原市、南足柄市)を指し、現在のところ縄文時代草創期の遺跡(旧石器時代最末期を含む)は39箇所確認されている(註1)。その内、図化されている遺跡は30遺跡である。

### 2. 遺跡

遺跡の種類には、多くの石器、大量の剥片・碎片等を出す石器製作址と石器や土器が単発で出土する遺跡の2種類に大別できる。

前者の代表的な遺跡は、清川村の宮ヶ瀬遺跡群北原遺跡(5)・馬場遺跡(11~17)、伊勢原市の三ノ宮・宮ノ前遺跡(30~53)、三ノ宮・下谷戸遺跡(54~70)が挙げられ、槍先形尖頭器、有舌尖頭器の製作址と土器が検出されている。

特に北原遺跡ではL1S相当層で未製品の槍先形尖頭器、搔器、削器、礫器、叩石、台石、石核等約1,000点の石器群と土器片13点が出土している。土器の胴部の小破片であり、文様もなく、胎土には纖維を特徴的に含んでいる。一方、馬場遺跡では同一層順で槍先形尖頭器の製作址が検出されてはいるものの土器は共伴していない(註2)。

三ノ宮・宮ノ前遺跡のI・IV次調査では約50m<sup>2</sup>の調査範囲内で草創期の遺物集中区が1箇所検出され、微隆起線文、爪形文の土器が約50点、有舌尖頭器、槍先形尖頭器、石斧、搔器、削器、叩石等の石器が約730点出土している。中でも剥片、碎片が非常に多く、有舌尖頭器の製作址として考えられる。また、図化していないが槍先形尖頭器の未製品のようなプランク状のものも存在する。石材は一部に黒曜石、硬質細粒凝灰岩の剥片、碎片があるが、ほとんどがガラス質黒色安山岩で、原石面(転石面)ではなく、剥片状の素材が遺跡へ持ち込まれた可能性が高い。

三ノ宮・下谷戸遺跡では有舌尖頭器、槍先形尖頭器、搔器、削器、叩石、台石、局部磨製石斧、石鎌等の石器と土器51点の約20,000点が出土し、県内最大級の遺跡である。遺構は長楕円形の土坑が検出され、中から有舌尖頭器、槍先形尖頭器も出土している。石材はガラス質黒色安山岩が主体で、拳大的な原石や原石面を持つ剥片も多く、原石のまま遺跡へ持ち込まれた可能性が高い(註3)。

後者は土器が伴うもの(A)と石器だけのもの(B)とに分けられる。

(A)は伊勢原市の高森・番場遺跡(71~77)、高森・一ノ崎遺跡(78)、毘沙門池西遺跡(実測図未発表)、坪ノ内・樅戸遺跡(実測図未発表)、平塚市の原口遺跡(実測図未発表)の5遺跡がある。

高森・番場遺跡は表採資料で、隆帯に工具による爪形文が施されている土器と小型の流紋岩質凝灰岩製の尖頭器が出土している(註4)。高森・一ノ崎遺跡は微隆起線文と有舌尖頭器が出土している。土器

は横位と懸垂状に下がる微隆起線があり、格子状か弧状になる可能性もある(註5)。毘沙門池西遺跡は表採資料で、長さ約4～8cmの細身の槍先形尖頭器が30点と数百点以上の剥片・碎片があり、槍先形尖頭器の製作址の可能性が非常に高い。石材はほとんどガラス質黒色安山岩である。また、土器の細片も出土し、胎土から草創期のものと考えている(註6)。坪ノ内・榎戸遺跡でも細身の槍先形尖頭器、微隆起線文が出土している(註7)。原口遺跡は爪形文土器、有舌尖頭器、槍先形尖頭器等が出土している(註8)。

(B)は遺跡内で単独、後世の遺構の中等から出土し、遺跡の性格は狩場的な遺跡として考えられ、比較的数多く存在する。城山町の川尻遺跡(1～4)、清川村の宮ヶ瀬遺跡群ナラサス遺跡(6～7)・南遺跡(8～10)、厚木市の上古沢山田遺跡(18)、鳶尾No.41遺跡(19)、飯山上ノ原遺跡(20)、子合頭・妙見谷遺跡(21～29)、伊勢原市の岡崎・天神下遺跡(79)、東大竹・山王塚(八幡台)遺跡(80)、比々多第二地区遺跡群(81)、善波・上坂東遺跡(82)、平塚市の向原遺跡(83～85)、権現堂第2遺跡(86)、秦野市の太岳院遺跡(87～89)、東北久保遺跡(90)、天神台遺跡(91)、根丸島遺跡(92)、東開戸遺跡(93)、東田原八幡遺跡(94)、草山遺跡(95)、砂田台遺跡(96～97)、大磯町の西久保北原遺跡(98)(註9)、小田原市の天神山台遺跡(99～101)、関東学院大学校内遺跡(102)が該当する。

### 3.まとめ

今回、神奈川県西部の資料紹介をしてきたが、ほとんどが未発表、単独出土、表採資料等であり、資料的には決して十分ではない。しかし、いくつかの問題点を挙げておきたい。

#### 草創期の起源(神子柴・長者久保文化)について

宮ヶ瀬遺跡群ではL1S層から土器が出土し、3遺跡から槍先形尖頭器の製作址が検出され、土器が共伴する遺跡(北原遺跡)、共伴しない遺跡(馬場遺跡、南遺跡)があり、槍先形尖頭器は神子柴・長者久保文化の尖頭器によく似ている。また、小田原市の関東学院大学校内遺跡の槍先形尖頭器、天神山台遺跡の局部磨製石斧も神子柴系の範疇で捉えられ、当該期の資料の増加から城山町の風間遺跡群第1文化層(a)との関係や草創期の起源について考えてゆきたい(註10)。一方、土器は纖維質の無文で、月見野上野遺跡第一地点や相模野No.149遺跡等との関係も考えてゆきたい。

#### 石材について

ほとんどがガラス質黒色安山岩であり、箱根系のものである。原産地の早川流域、河口付近は伊勢原から直線距離にして約25kmあり、比較的近距離である。安山岩は直接入手したか、交易で手に入れたかが考えられる。三ノ宮・宮ノ前遺跡では原石面(転石面)等ではなく、一次加工した剥片状の素材が遺跡へ持ち込まれた可能性がある。一方、三ノ宮・下谷戸遺跡では拳大の原石や原石面を持つ剥片が多く、原石のまま直接遺跡へ持ち込まれている。

その他はホルンフェルス、硬質細粒凝灰岩で、酒匂川、金目川、相模川水系では比較的入手しやすい在地石材である。また、黒曜石は神津島のものが多い。

## 有舌尖頭器の製作方法

三ノ宮・宮ノ前遺跡の有舌尖頭器は、一次加工した剥片からある程度分厚い剥片を取り、その剥片の周辺に調整加工を施し、成形してゆく。製作址のため完形品はほとんどなく、加工途中か、欠損品が多く出土している。三ノ宮・下谷戸遺跡のものより最大幅、厚み、重みがある。

### 土器について

土器はあまり多く出土していないが、微隆起線文の横位、格子、蛇行、線上に爪形、爪形文等があり、ほとんどが微隆起線文段階である。

### 県西部の編年

表1 神奈川県西部の主な遺跡の編年表

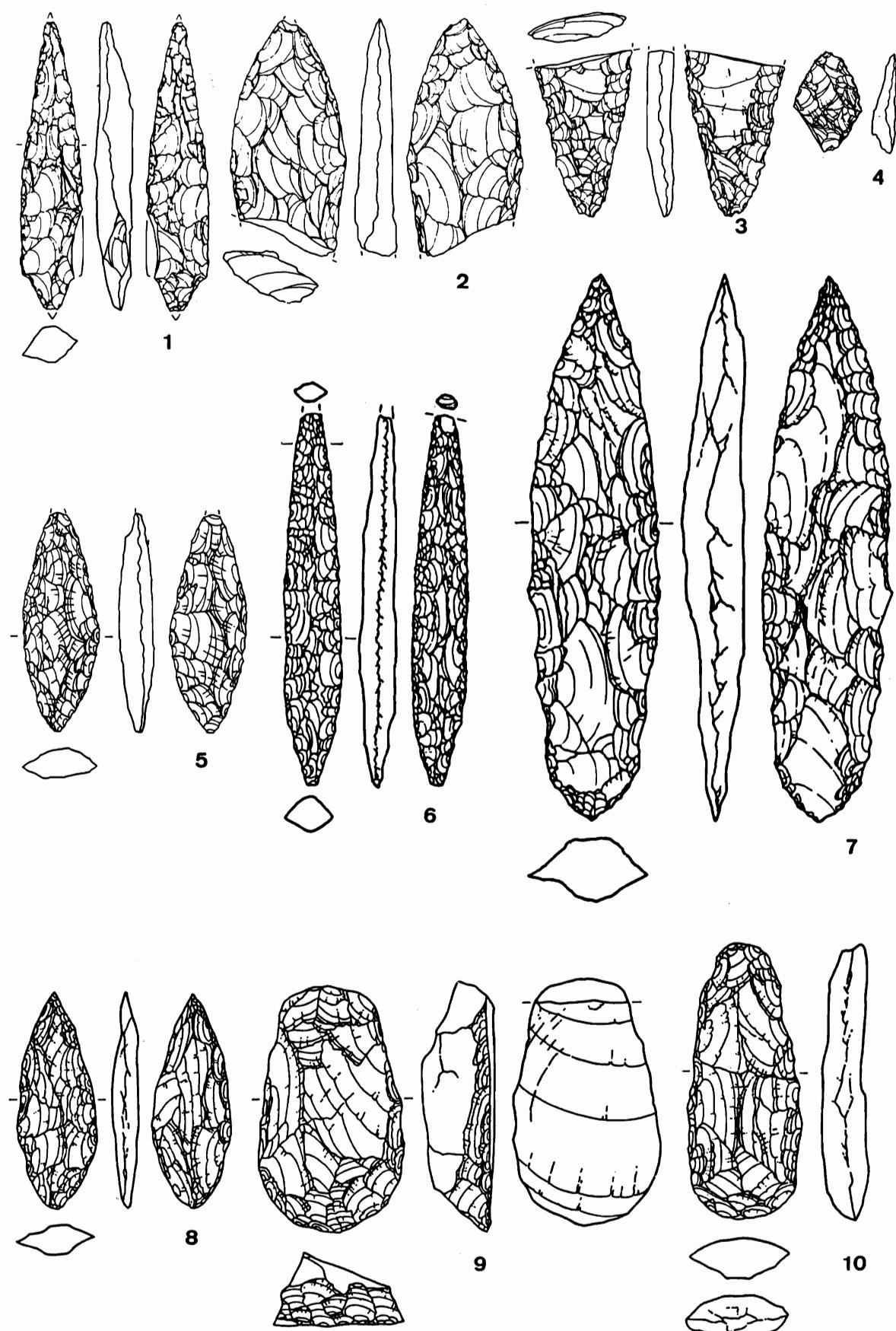
	石 器・土 器 の 様 相	主 な 遺 跡
I	神子柴型、無文	北原、馬場、関東学院大学校内、天神山台
II	有舌、尖頭器、微隆起線文(横位、格子等)	三ノ宮・宮ノ前
III	有舌、尖頭器、微隆起線文(横位、懸垂状等)	高森・一ノ崎、坪ノ内・櫻戸、毘沙門池西
IV	有舌、石鏃、微隆起線文(横位、爪形等)	三ノ宮・下谷戸
V	有舌、爪形文	原口

\*有舌は有舌尖頭器、尖頭器は槍先形尖頭器

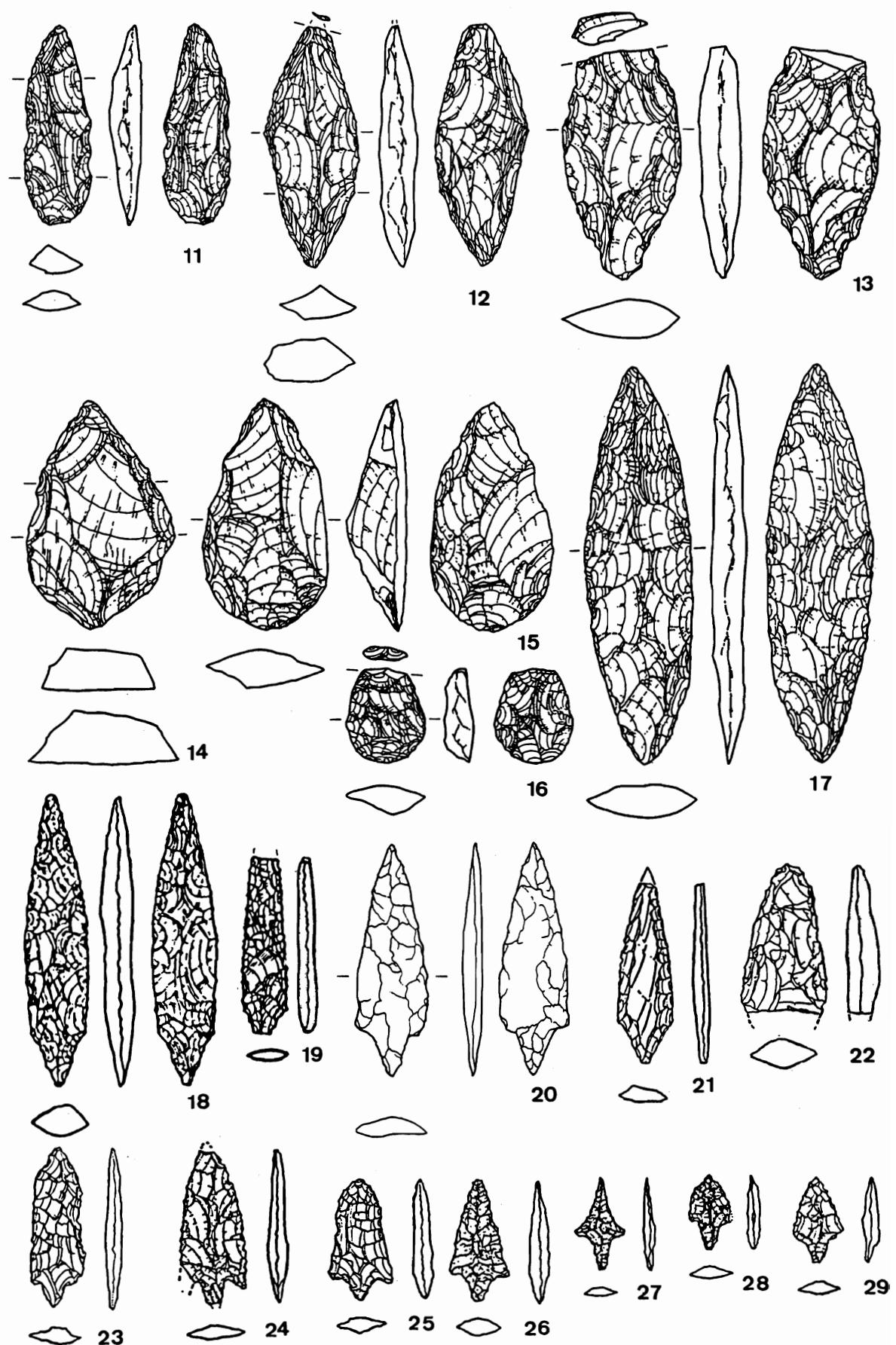
- 註1. 「かながわの考古学 第4集 神奈川の考古学の諸問題」で県内の縄文時代草創期の遺跡が網羅されている。  
 2. 鈴木次郎 1995「宮ヶ瀬遺跡群」『第3回石器文化研究交流会－発表要旨－』で報告された。  
 3. (財)かながわ考古学財団の宍戸信悟・三瓶裕司・宮坂淳一・畠中俊明氏のご教示ならびに資料を実見させていただいた。  
 4. 中村喜代重氏の採集資料を筆者が資料報告している。  
 5. (財)かながわ考古学財団の西川修一・天野賢一氏のご教示ならびに資料を実見させていただいた。  
 6. 筆者ならびに宍戸信悟・三瓶裕司が採集したもので、図化されていない。伊勢原市教育委員会で保管している。  
 7. 坪ノ内・櫻戸遺跡発掘調査団の高橋勝広氏、玉川文化財研究所の相原俊夫・麻生順司氏のご教示ならびに資料を実見させていただいた。  
 8. (財)かながわ考古学財団の長岡文起氏のご教示ならびに資料を実見させていただいた。  
 9. 「大磯の遺跡」の中では先土器時代として表記されているが、実測図、石材から草創期の範疇として捉えたい。  
 10. 風間遺跡群第I文化層(a)は尖頭器を主体とした文化層で、土器、有舌尖頭器、石鏃を伴わず、旧石器時代最末期として報告されている。

### 参考文献

- 鈴木一男 1985「大磯の遺跡－原始から江戸時代まで－」大磯町教育委員会  
 麻生順司他 1989「法政大学多摩校地城山地区 風間遺跡群発掘調査報告書」  
 難波 明・諏訪間伸 1989「伊勢原市三ノ宮・宮ノ前遺跡の調査」『第13回神奈川県遺跡研究発表会要旨』 神奈川県遺跡調査・研究発表準備委員会  
 伊勢原市教育委員会 1990「三ノ宮・宮ノ前遺跡」『文化財ノート』(第1集) 伊勢原市教育委員会  
 山口剛志・諏訪間順他 1992「小田原市内における関東ローム層の調査」『第18回神奈川県遺跡研究発表会要旨』 神奈川県遺跡調査・研究発表準備委員会  
 諏訪間順 1994「天神山台遺跡」『小田原市文化財報告書第50集』 小田原市教育委員会  
 旧石器(先土器・岩宿)時代研究プロジェクトチーム 1994「旧石器時代終末における石器群の諸問題」『かながわの考古学第4集 神奈川の考古学の諸問題』神奈川県立埋蔵文化財センター  
 諏訪間伸 1994「伊勢原市内における旧石器・縄文時代草創期の遺跡について－高森・番場遺跡の表探資料から－」『文化財ノート』(第3集) 伊勢原市教育委員会  
 大倉潤・加藤学 1995「秦野市における先土器時代・縄文時代草創期の遺物」『秦野の文化財第31集』

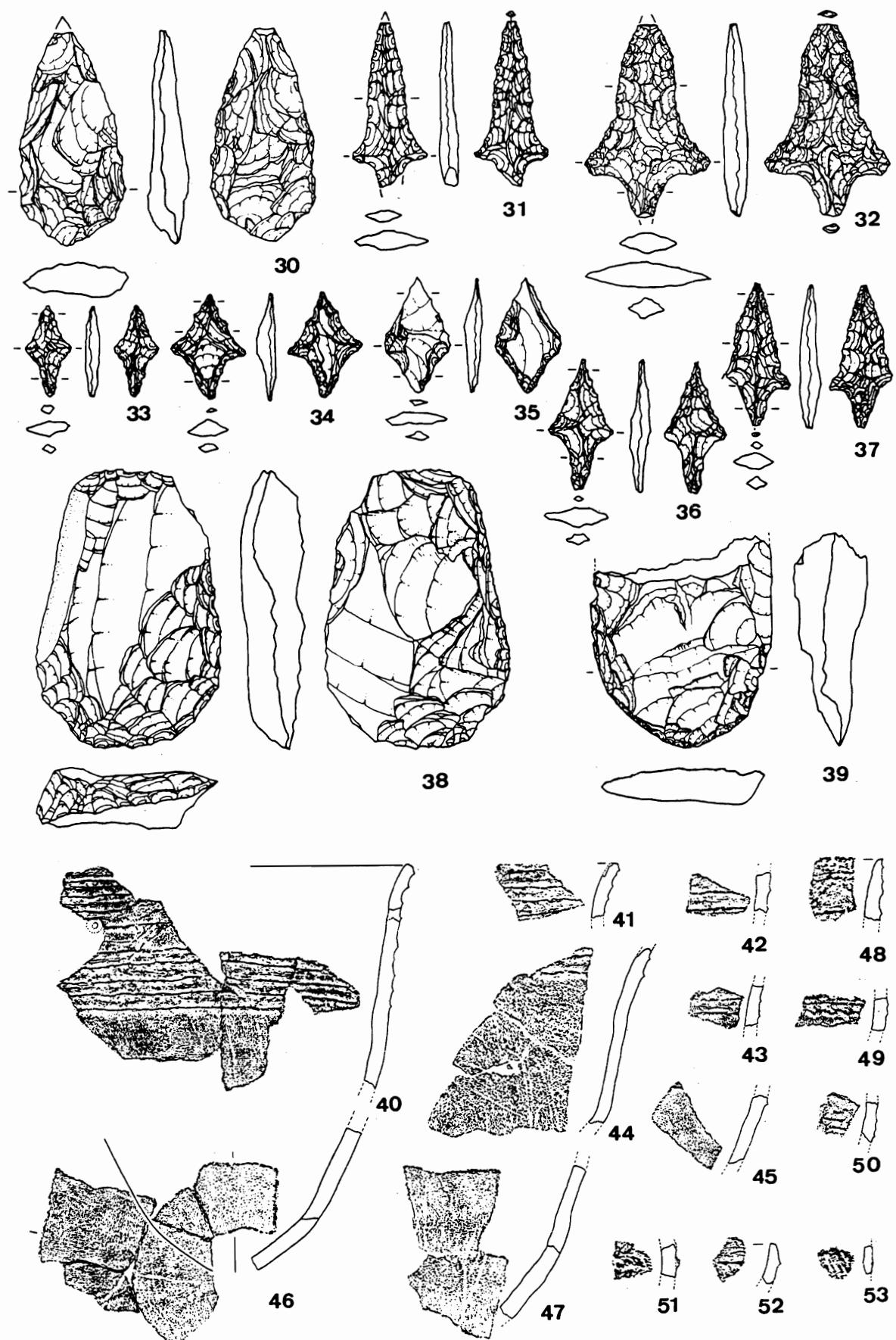


第1図 神奈川県西部の実測図遺物 1 (石器の実測図は2/3、土器の拓本図は1/3。以下同じ)  
川尻遺跡(1~4)、宮ヶ瀬遺跡群(北原遺跡-5, ナラサス遺跡-6~7, 南遺跡-8~10)

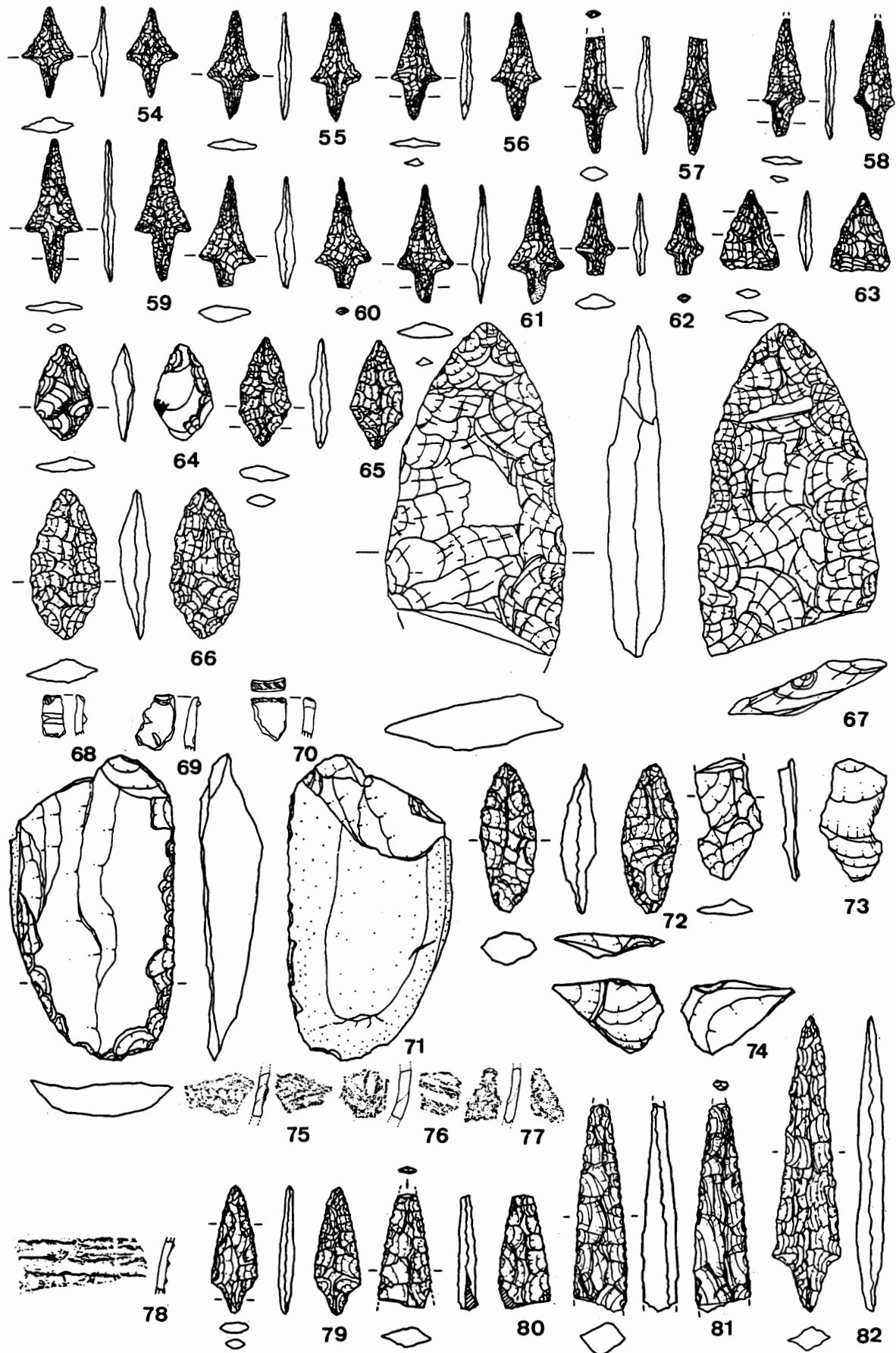


第2図 神奈川県西部の実測図遺物2

宮ヶ瀬遺跡群(馬場遺跡-11~17), 上古沢山田遺跡(18), 高尾山41遺跡(19), 飯山上ノ原遺跡(20), 子合頭・妙見谷遺跡(21~29)

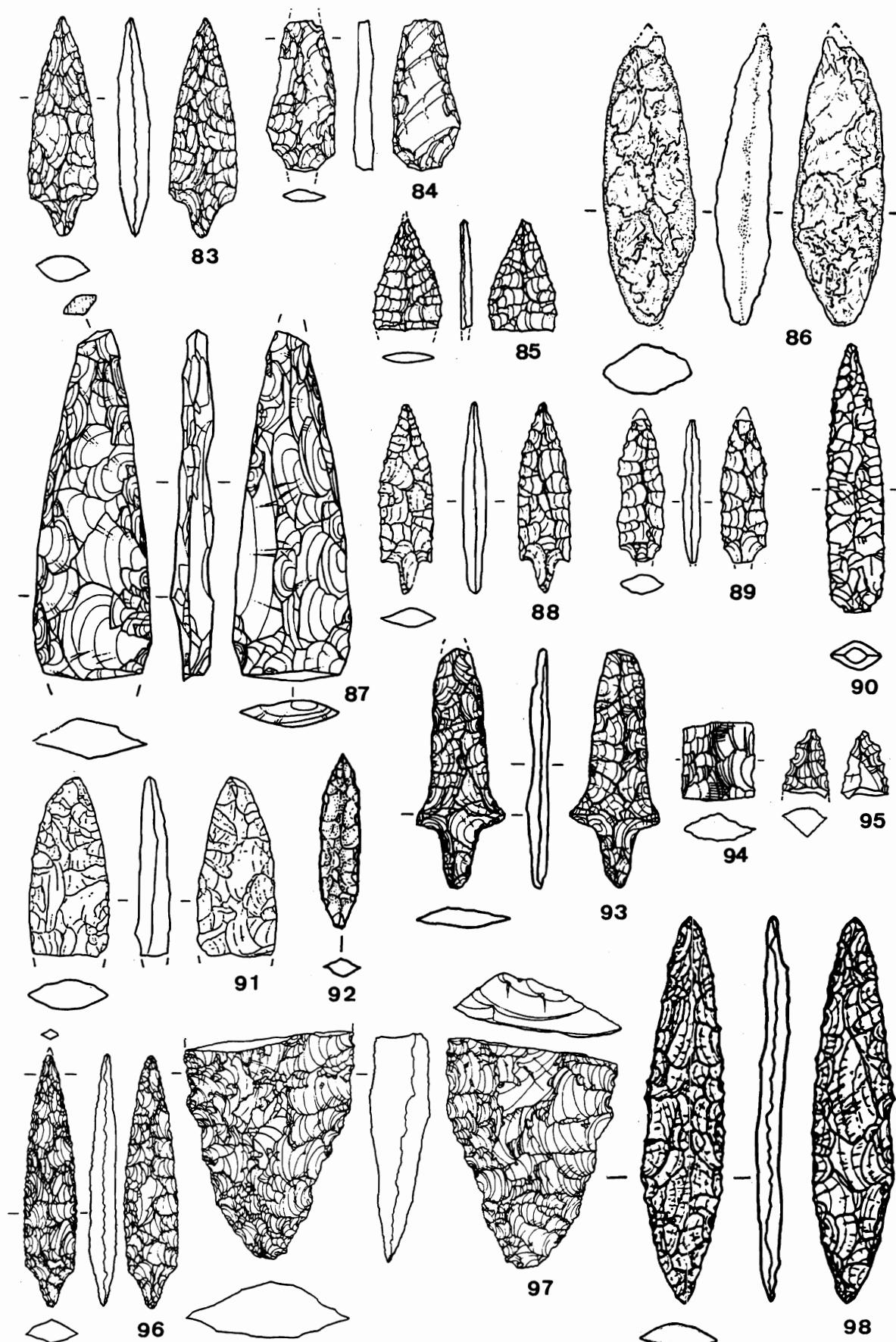


第3図 神奈川県西部の実測図遺物3  
三ノ宮・宮ノ前遺跡(30~53)



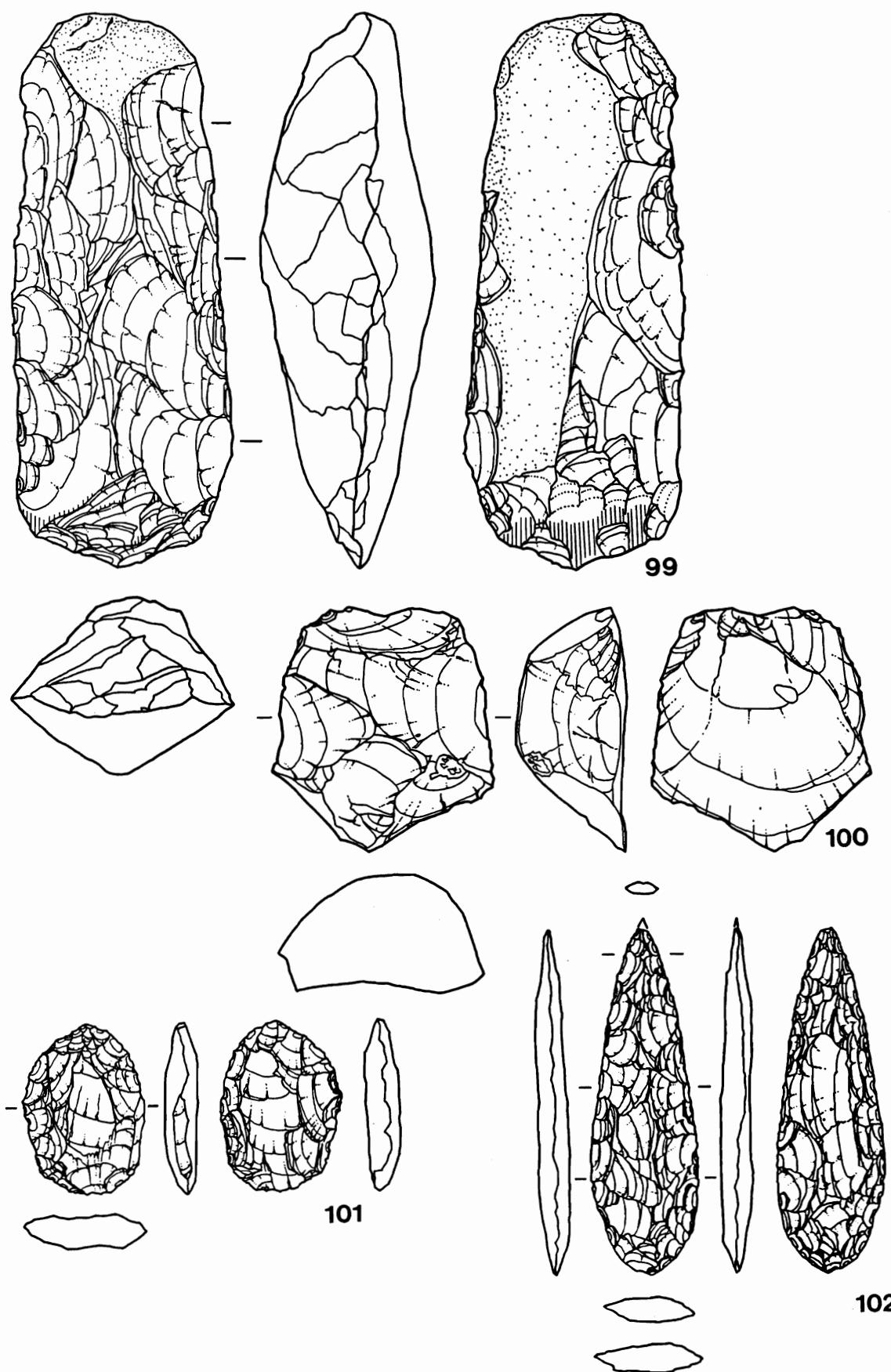
第4図 神奈川県西部の実測図遺物4

三ノ宮・下谷戸遺跡(54~70), 高森・番場遺跡(71~77), 高森・一ノ崎遺跡(78), 岡崎・天神下遺跡(79), 東大竹・山王塚(八幡台)遺跡(80),  
比々多第二地区遺跡群(81), 善波・上坂東遺跡(82)



第5図 神奈川県西部の実測図遺物5

向原遺跡(83~85), 横須賀第2遺跡(86), 太岳院遺跡(87~89), 東北久保遺跡(90), 天神台遺跡(91), 横丸島遺跡(92), 東開戸遺跡(93), 東田原八幡遺跡(94), 草山遺跡(95), 砂田台遺跡(96~97), 西久保北原遺跡(98)



第6図 神奈川県西部の実測図遺物6  
天神山台遺跡(99~101)、関東学院大学校内遺跡(102)

## かながわにおける縄文草創期の使用石材

柴田 徹

### 1. はじめに

横浜市は花見山遺跡、藤沢市は南鍛冶山遺跡、慶應大学藤沢キャンパス遺跡、大和市は月見野上野遺跡、長堀北遺跡、相模野149遺跡、伊勢原市は高森・番場遺跡、三ノ宮・宮ノ前遺跡、三ノ宮・下谷戸遺跡、秦野市は太岳院91-1遺跡、東北久保遺跡の石器を観察対象にした。時間等の関係もあり、遺物の全てを観察した遺跡と一部のみを観察した遺跡等様々であり遺跡により質的に異なる観察結果を得る事になってしまった。この限界の中での議論をする。

なお、本文中で用いる石質名は、割れ口が真っ黒でガラス状の光沢が強く、斑晶の少ないもしくは無い安山岩にたいしてガラス質黒色安山岩の名称を用いる。この岩石は以前「緻密黒色安山岩」と呼んでいたものである。なおこの岩石と同じ顔つきをした岩石に対して、黒色安山岩、緻密質黒色安山岩、ガラス質安山岩、無斑晶質安山岩等の名称も用いられている。硬質細粒凝灰岩は緑色凝灰岩中の細粒緻密で硬質なもので、新鮮な割れ口はガラス質な様相を呈し、風化によりやや泥質もしくは砂質な外観を呈するものに用いる。同様の緑色凝灰岩で更にガラス質で風化がほとんど認められないものを珪質細粒凝灰岩とした。硬質・珪質の完全な識別は困難であるので硬質細粒凝灰岩として扱う場合が多い。珪質頁岩は、チャートにごく近いのだがやや泥質な感じのするものに用いた。チャートとの完全な識別は困難なので、本文中で検討する場合はチャートに含める事にする。頁岩の名がつくものに硬質頁岩があるが、これは様々な程度の褐色を呈した極めて細粒緻密な珪質な印象を受ける光沢のある頁岩に用いた。碧玉(ジャスパー)のなかで赤の強い物を赤玉石・黄色が強い物を黄玉石とした。珪質岩としたものは、ガラス質な外観を呈する珪質な岩石で、名称の付けられないものに用いた。

### 2. 使用石材の石質について

観察した遺物の遺跡ごとの石質組成表を表1に示す。

表から明らかなように、ガラス質黒色安山岩と硬質細粒凝灰岩が県内の大部分の地域で主要な石材となっている。花見山遺跡と月見野上野遺跡においてのみチャートおよび珪質頁岩が主要石材として加わっている。特に花見山遺跡においては硬質細粒凝灰岩の4倍近く、全石材の50%以上をチャートが占めている。他に、ホルンフェルス・珪質細粒凝灰岩・流紋岩・頁岩・黒曜石・硬質頁岩などがある。

この使用石材の石質は表2の旧石器時代の使用石材の石質と比べると、黒曜石の量が極端に異なる点を除くとほぼ同じといえる。なぜ黒曜石が草創期において極端に少ないのでその原因については、不明である。

表3の、主に縄文中期の遺跡の使用石材の石質と比べると、全く異なる事が明かである。石材の石質からみた場合、縄文草創期とは言うが、縄文ではなく旧石器時代にごく近い時代と言う事ができる。

花見山遺跡のみチャートが極端に多く、他の遺跡と大きく異なる。この事実は偶然と言うよりは、

花見山遺跡の属する地域の特性と見るべきと考えている。後に述べる、石材の採集可能地・分布地と関連があると推定している。使用石材の石質から、神奈川は恐らく横浜東部・川崎地域とそれ以外に大きく2つに少なくとも分けられるのではないだろうか。更に、三浦半島の部分、伊勢原もしくは秦野より西の地域など細分できる可能性がある。今後の検討課題としたい。

### 3. 有舌尖頭器の石質について

表4に各遺跡の有舌尖頭器の石質組成を示す。

ガラス質黒色安山岩が最も主要な石材であり、次いで硬質細粒凝灰岩・珪質細粒凝灰岩が主要な石材である。チャートは花見山遺跡においてのみガラス質黒色安山岩とほぼ同じ点数出土し主要な石材となっている。

花見山遺跡以外においては大半の遺跡でガラス質黒色安山岩が主要な石材で、補助的に硬質細粒凝灰岩が使用されている。慶應I区(慶應III区も?)においては硬質細粒凝灰岩が主要な石材で、ガラス質黒色安山岩が補助的な使用となっている。

いずれにせよ、かなり強い石材的二物性的な選択がなされている事は明かである。

### 4. 有舌尖頭器と剥片類の出土点数の比較

有舌尖頭器と剥片類の出土点数を表5に示す。

湘南地域において、ガラス質黒色安山岩・硬質細粒凝灰岩の有舌尖頭器と剥片類の点数を比較してみる。II期の慶應I区のガラス質黒色安山岩を除いて、剥片類が有舌尖頭器の約6倍以上とはるかに多く出土している。II期の慶應I区のガラス質黒色安山岩については、有舌尖頭器4点に対して剥片類7点と少ない。この時期のみ有舌尖頭器の石材に硬質細粒凝灰岩が多いという事、チャートも1点出土している点を考慮すると、何か他の時期とは異なる事があった可能性がある。

武藏地域の花見山遺跡においては、ガラス質黒色安山岩の剥片類の有舌尖頭器に対する比率が湘南地域より低いと言う点と、硬質細粒凝灰岩は表採で1点有舌尖頭器が出土しているのみであるが、剥片類は55点出土している。また、チャート類はV段階を除いて剥片類が5倍以上の点数出土している。これらの事の意味するところは、石器製作と石材獲得の何らかの関係を示すものと考えられるが、詳しくは考古学の方々に考えて頂きたい。

### 5. 石材の採集可能地と使用石材の地域性について

第1図に旧石器時代の「代表的な使用石材の石質の組み合わせからみた地域区分と代表的な石材のおよその採集可能推定地」(95年度岩宿フォーラム予稿集p.53)に加筆したものを示す。

以下に、各地で採集可能な主な石材の石質名を列挙する。／の前に上げてある石材が剥片石器に多く用いられるものである。

- I) 相模川水系・相模野台地の礫層・丹沢山地：硬質細粒凝灰岩・珪質細粒凝灰岩・流紋岩質凝灰岩・ホルンフェルス・頁岩／中粒凝灰岩・粗粒凝灰岩・砂岩・閃綠岩・はんれい岩・安山岩・玄武岩

- II) 多摩川水系・武藏野台地の礫層：チャート・珪質頁岩・頁岩・ホルンフェルス／砂岩・閃綠岩
- III) 酒匂川：硬質細粒凝灰岩・珪質細粒凝灰岩／中粒凝灰岩・粗粒凝灰岩・閃綠岩・はんれい岩・  
緑色片岩・角閃岩・安山岩・玄武岩
- IV) 早川河口：ガラス質黒色安山岩／安山岩
- V) 箱根明神岳より流れ出す沢：ガラス質黒色安山岩／安山岩
- VI) 白銀山より流れ出す沢：ガラス質黒色安山岩／安山岩
- VII) 米神より湯河原にかけての海岸：ガラス質黒色安山岩／安山岩
- VIII) 土肥港南の海岸：赤玉石・黄玉石・メノウ・ガラス質黒色安山岩／安山岩
- IX) 仁科大浜の海岸：赤玉石・黄玉石・メノウ・ガラス質黒色安山岩・流紋岩／安山岩
- X) 河津浜の海岸：赤玉石・黄玉石・メノウ・ガラス質黒色安山岩／安山岩
- a) 硬質頁岩の採集可能地は関東地方および周辺にはない。
- b) 赤玉石・黄玉石の産地は最近鎌川上流・茨城県中部の海岸で発見された。
- c) ガラス質黒色安山岩は利根川・茨城県中部の海岸・千葉県市原市の万田野礫層中でも採集可能
- d) 黒色頁岩は利根川のみで採集可能

以上の石材の採集可能地の分布をもとに、神奈川の草創期の石材の採取地を推定すると、ガラス質黒色安山岩は石材の肉眼的特徴から箱根山周辺のどこかに、硬質・珪質細粒凝灰岩は主に相模川水系など丹沢層群中を流れる川に、チャート・珪質頁岩は多摩川水系に、ホルンフェルスは相模川もしくは多摩川に求める事ができる。

チャートの多い花見山遺跡であるが、神奈川の他の地域に比べ多摩川の影響の大きい遺跡・地域であると考えるのが最も合理的である。神奈川を考えるとき、東京の多摩・武藏野との関係も考慮する必要がある。

#### 参考文献

- 柴田 徹 1994 「使用石材から見た旧石器時代の南関東における地域性について」『松戸市立博物館紀要 第1号』 p.3-p.25 松戸市立博物館
- 柴田 徹 1995 「南関東における石器石材」『石器石材－北関東の原石とその流通を中心として』 p.50-53 岩宿文化資料館岩宿フーラム実行委員会
- 中村喜代重 1995 「旧石器時代の相模野台地と漂灰岩原産地」『旧石器考古学51』 p.11-18

表1 観察した遺物の石質組成表

	遺跡名	ガラス 質黒色 安山岩	硬質 細粒 凝灰岩	珪質 細粒 凝灰岩	流紋岩 チャート	珪質 頁岩	頁岩	砂岩	ホル フェルス	珪質岩	黒曜石	メノウ	硬質 頁岩	その他	計	
横浜市	花見山	137	87		13	256	50	13	1	27	7		3	9	603	
		22.7%	14.4%	0.0%	2.2%	42.5%	8.3%	2.2%	0.2%	4.5%	1.2%	0.0%	0.5%	1.5%	100.0%	
藤沢市	南鎌治山	89	170	6						8	2				275	
		32.4%	61.8%	2.2%						2.9%	0.7%				100.0%	
	・慶応V区	57	1							2	1				61	
		93.4%	1.6%							3.3%	1.6%				100.0%	
	慶応I区	11	104	1		1			3	22	4				146	
		7.5%	71.2%	0.7%		0.7%			2.1%	15.1%	2.7%				100.0%	
	慶応III区	3	16							2					21	
		14.3%	76.2%							9.5%					100.0%	
大和市	月見野上野	2	11	2		6	1	8		5					1	36
	1地点I文化	5.6%	30.6%	5.6%	0.0%	16.7%	2.8%	22.2%		13.9%				2.8%		100.0%
	長堀北1	4	2				1	1		8	1				3	20
	1文化層	20.0%	10.0%					5.0%	5.0%	40.0%	5.0%			15.0%		100.0%
	相模野149 上部	21	1		1						6				29	
		72.4%	3.4%		3.4%						20.7%				100.0%	
伊勢原市	高森・番場		1		1					2					4	
			25.0%		25.0%					50.0%					100.0%	
	三ノ宮・宮ノ前	9	3												12	
		75.0%	25.0%												100.0%	
	三ノ宮・下谷戸	9	4		1					1					15	
		60.0%	26.7%		6.7%					6.7%					100.0%	
秦野市	大岳院91-1	1	1											1	3	
		33.3%	33.3%											33.3%		100.0%
	東北久保	1													1	
		100.0%														
	計	344	401	9	16	263	52	22	4	77	8	13	0	4	13	1226
		28.1%	32.7%	0.7%	1.3%	21.5%	4.2%	1.8%	0.3%	6.3%	0.7%	1.1%	0.3%	1.1%	100.0%	

表2 相模野台地の旧石器時代の石質組成表

層位	ガラス 質黒色 安山岩	硬質 細粒 凝灰岩	珪質 細粒 凝灰岩	流紋岩 チャート	珪質 頁岩	頁岩	砂岩	ホル フェルス	珪質岩	黒曜石	メノウ	硬質 頁岩	その他	計	
L1S-B0	90	164	8	4	3	1	2		100	8	1042			2	1424
	6.3%	11.5%	0.6%	0.3%	0.2%	0.1%	0.1%		7.0%	0.6%	73.2%			0.1%	100.0%
B0-L1H	76	62	14	47	3	2	23		46		447			20	740
	10.3%	8.4%	1.9%	6.4%	0.4%	0.3%	3.1%		6.2%		60.4%			2.7%	100.0%
B1	9	4	31		8		2		4	26	136				220
	4.1%	1.8%	14.1%		3.6%		0.9%		1.8%	11.8%	61.8%				100.0%
L2-B2U							4			1	574			2	581
							0.7%			0.2%	98.8%				100.0%
B3	63	2			1		1		2					1	70
	90.0%	2.9%			1.4%		1.4%		2.9%					1.4%	100.0%

表3 主に縄文中期の石質組成表

遺跡名	ガラス 質黒色 安山岩	硬質 細粒 凝灰岩	珪質 細粒 凝灰岩	流紋岩 チャート	珪質 頁岩	頁岩	砂岩	ホル フェルス	珪質岩	黒曜石	メノウ	硬質 頁岩	安山岩	中～ 粗粒 凝灰岩	その他	計
帷子峰				6	2		9	51	160	2		71	166	46	513	
				1.2%	0.4%		1.8%	9.9%	31.2%	0.4%		13.8%	32.4%	9.0%	100.0%	
早川天神森				1	4		248	120		100		82	93	64	712	
				0.6%			34.8%	16.9%		14.0%		11.5%	13.1%	9.0%	33.6%	
新戸				35			1394	90		838		455	600	150	3562	
				1.0%			39.1%	2.5%		23.5%		12.8%	16.8%	4.2%	100.0%	
真田大原	3			12	1		7	30	97	193		135	132	33	643	
	0.5%			1.9%	0.2%		1.1%	4.7%	15.1%	30.0%		21.0%	20.5%	5.1%	100.0%	

表4 有舌尖頭器の石質組成表

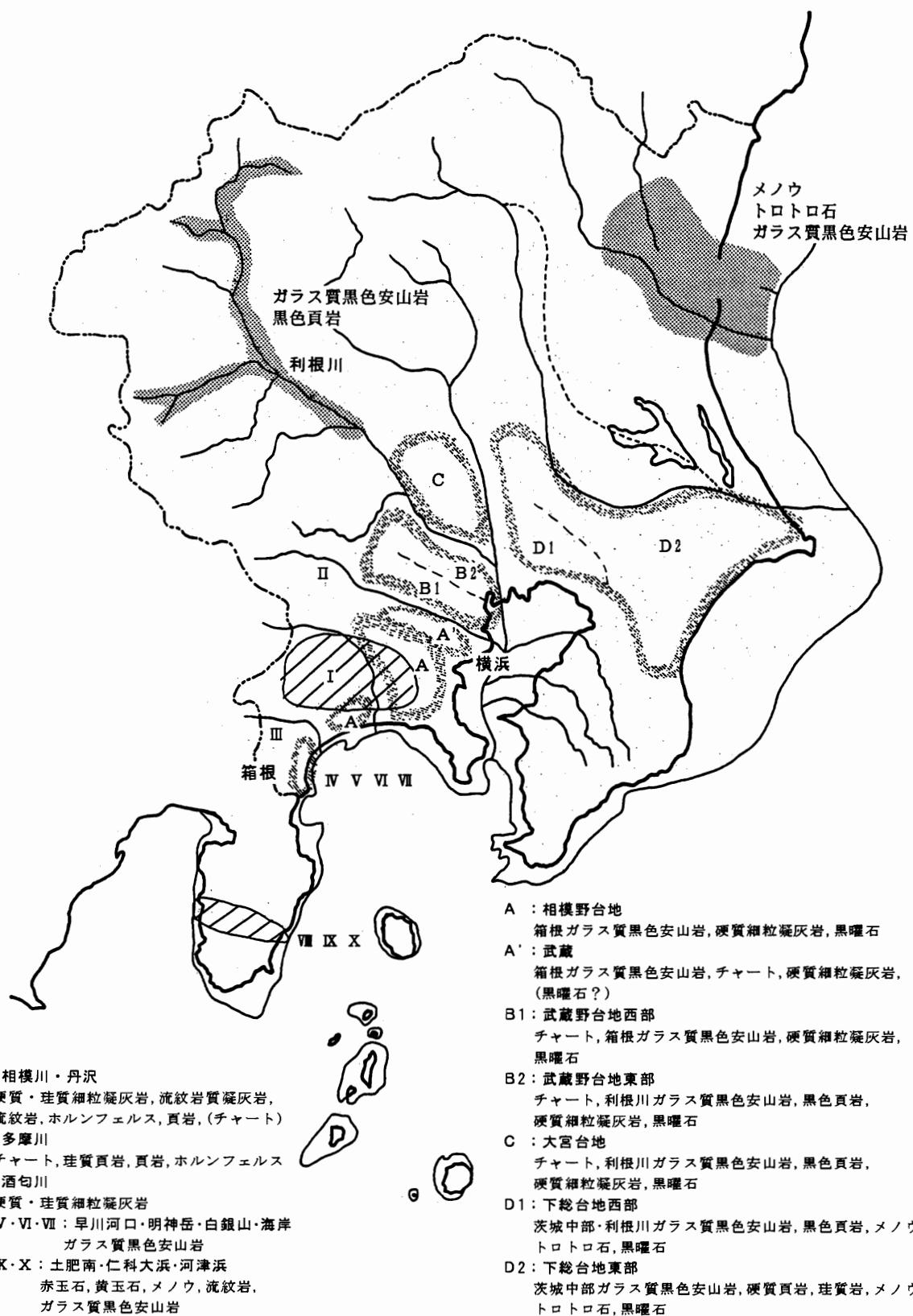
	遺跡名	ガラス	硬質 質黒色 細粒	珪質 細粒	流紋岩	チャート	珪質 頁岩	頁岩	砂岩	ホルン フェルム	珪質	黒曜石	メノウ	硬質 頁岩	計
	安山岩 凝灰岩 凝灰岩														
横浜市	花見山	21	1	2	1	18	1	2	0	0	0	0	0	0	47
藤沢市	南鍛冶山	9	1												10
	慶応V区	4													4
	慶応I区	4	16	1		1						1			23
	慶応III区		2												2
大和市	月見野上野	1		1			1								3
	長堀北1		1												1
	相模野149				1										1
	上草柳														0
伊勢原市	三ノ宮・宮ノ前	6	1												7
	三ノ宮・下谷戸	7	3												10
秦野市	大岳院91-1		1												1
	東北久保														0
	計	52	26	4	2	19	2	2	0	0	0	1	0	1	109

表5-1 湘南地域の草創期隆線文期の使用石材

時期	遺跡名		ガラス	硬質 質黒色 細粒	珪質 細粒	流紋岩	チャート	珪質 頁岩	頁岩	砂岩	ホルン フェルム	珪質岩	黒曜石	メノウ	硬質 頁岩	計
	安山岩 凝灰岩 凝灰岩															
I a期	南鍛冶山	有舌尖頭器	9	1												10
	1号集中	剥片類	80	169	6					8		2				265
I b期	慶応V区	有舌尖頭器	4													4
	集中	剥片類	53	1						2	1					57
II期	慶応I区	有舌尖頭器	4	16	1		1						1			23
	A～D集中	剥片類	7	88					3	22		3				123
III期	慶応III区	有舌尖頭器		2						2						2
	A～B集中	剥片類	3	14						2						19
	有舌尖頭器	17	19	1		1			0	0	0	1				39
	剥片類	143	272	6		0		3	34	1	5					464
	合計	160	291	7		1		3	34	1	6					503

表5-2 花見山遺跡の草創期の使用石材

層位		ガラス	硬質 質黒色 細粒	珪質 細粒	流紋岩	チャート	珪質 頁岩	頁岩	砂岩	ホルン フェルム	珪質岩	黒曜石	メノウ	硬質 頁岩	計
	安山岩 凝灰岩 凝灰岩														
IV	有舌尖頭器														0
	剥片類					1									1
V	有舌尖頭器						1								1
	剥片類		3		1	1	1	1							7
V a	有舌尖頭器	3		1		5		1					1		11
	剥片類	10	17		4	32	7	1	1				1		73
V b	有舌尖頭器	7		1	1	10	1	1							21
	剥片類	11	13		1	39	16	4	1						85
VI	有舌尖頭器	7				1									8
	剥片類	10	17		1	26	3	1	1				2		61
VII	有舌尖頭器	3				1									4
	剥片類	10	3		1	7	1		1			1			24
VIII	有舌尖頭器		3												0
	剥片類		3												3
表採	有舌尖頭器	1	1												2
	剥片類	1	2												3
	有舌尖頭器	21	1	2	1	18	1	2	0	0	0	0	0	1	47
	剥片類	45	55	0	8	106	28	7	0	4	0	0	3	1	257
計	合計	66	56	2	9	124	29	9	0	4	0	0	3	2	304



第1図 使用石材の代表的な石質の組み合わせからみた地域区分と代表的な石材のおよその採集可能推定地(旧石器時代及び縄文草創期)

## 植生を中心とした縄文草創期の自然環境

増渕和夫・上西登志子

### 1. はじめに

地球上の気候はつねに変動している。気候が非定常的であることこそが自然であると言える。変動の時間スパンは長いものから短いものまで様々である。また、変動しているのは気候だけでなく、海面水や大地そのものまでが、つまり自然環境が変動している。特に、日本列島は世界的に見ても自然環境の変動が激しい地域と言われている。列島に住む人々は様々な自然環境の変動と向かい合いつづらしてきたことになる。さらに、人々の暮らしの有り様は自然から影響を受けるだけでなく、自然に影響も与えてきた。

気候変動のやや長い時間スパンでみれば、約10,000年前頃に最終氷期は終わり、現在へと繋がる間氷期=温暖期へと変わった。長い時間スパンと言ったが、たかだか1万数千年前には列島は氷河時代の直中にまだあったと言うことになる。この最終氷期から後氷期への移行期である最終氷期末期=晩氷期(約16,000～10,000年前)は激しく自然環境が変動した時代であった。

晩氷期のかながわの自然環境について語る十分なデーターは持ちえていないが、多摩丘陵を流れる鶴見川の開析谷で得たデーターをもとに知りうるところを報告させていただく。

### 2. 多摩丘陵における鶴見川開析谷の晩氷期の古環境

川崎市下水道局による下水処理場「麻生環境センター」(第1図)の建設工事中に晩氷期の古環境を知る上で貴重な堆積物が見出された。麻生環境センター(以下「環境センター」と呼ぶ)は源流から東流していた鶴見川が向きを南に変える地点の北東約200mに位置し、環境センターの南には鶴見川支流の真光寺川が屈曲を繰り返しつつ流れている。環境センターでは、下部更新統上総層群柿生層を不整合に覆って、沖積層(麻生沖積層と呼ぶ)が堆積している。さらに麻生沖積層中にも不整合が見出され、麻生沖積層下部層は晩氷期の堆積物、同上部層は縄文時代晚期以降の堆積物であることが判明した。上部層中には洪水によって運搬堆積したと考えられる直径1mを越える埋没樹が多数含まれていた。下部層基底の礫層は、層厚最大55cm、礫径最大15cm、礫種はチャートであり、礫層中の材化石の<sup>14</sup>C絶対年代は15,680±70y.B.P.である。その上位の泥炭層の絶対年代は14,200±160y.B.P.、14,000±200y.B.P.であった。さらに泥炭層中には3枚の火山灰層が挟まれており、下位のガラス質火山灰はUG(Tachikawa Upper Glassy Ash)、中位のスコリア層は青柳スコリア層、最上位のガラス質火山灰はUGの二次堆積であることが判明した(第2図)。これら火山灰層の既知の年代値と下部層各層準の年代値は整合的であった。下部層の堆積環境、古環境を推定するため、珪藻化石分析、材化石(表1)、大型植物遺体の分析(表2)、昆虫化石や蘇苔類化石の分析、花粉分析(第3図)を行った。

約16,000～14,000年前、当地の古植生はシラビソ、チョウセンゴヨウ、カラマツ属、トウヒ属などの針葉樹に、シラカバ、ハシバミ、ツノハシバミ、ハンノキ属などの落葉広葉樹を交える冷温帯から亜高山帯にかけて分布する針広混交林からなっていたと考えられる。シラビソ鱗片化石産出の意味は

大きい。亜高山帯針葉樹林は、現在の中部地方から東北地方にかけての高山の上部斜面や北海道地方の脊梁山地からオホーツク沿岸の丘陵に渡って成立している。本州中部で高度は1,500m以上、年平均気温は6℃以下の寒冷な地帯である。シラビソはこの亜高山帯針葉樹林の中核をなす樹種である。

武藏野台地立川面上に位置する野川中洲遺跡(約15,000~13,000年前)の花粉分析の結果も麻生環境センターと極めて類似している(大型植物遺体ではシラビソが産出していないが)。従って、約16,000~14,000年前、多摩丘陵や武藏野台地に亜高山帯針葉樹で特徴づけられる針広混交林が広く分布し、高度による気温遞減率を0.5℃/100mとすると当時の気候は年平均気温で現在より7℃は低かったと推定される。

約14,000~11,000年前については、大型植物遺体の産出がなく、花粉化石の産出層準も1つだけであるので、はっきりとはしないが、針広混交の冷温帯林の分布が想定される(第4・5図)。

### 3. 約30,000~10,000年前の日本及び関東平野の自然環境

最終氷期中には、約60,000年前と約20,000年前をピークとする2度の寒冷期(亜氷期)が知られ、これに伴って海面もマイナス100m近く低下したとされている。寒冷期の植生は、古い方がトウヒ属、カラマツが卓越し、新しい方がショウセンゴヨウが森林の主要素など若干の違いがあるものの、乾燥気候にあったことを示している。海面の低下が、対馬暖流の日本海への流入を阻んだことが、寒冷期における乾燥気候をもたらした大きな要因と言われている。

寒冷期以降の海面変動を東京湾地域でみると、寒冷期に100m近く低下していた海面は約18,000年以後温暖化と共に上昇を始め、約15,000年前頃までにマイナス70m近くまで達した後、約14,000年前頃までに再び若干低下し、以後約11,000年前まで上昇してマイナス30m付近に達する。さらに、約11,000~10,000年前の間にマイナス40mまで小海退する(第6図)。この小海退は世界的な一時的寒冷化と氷床の再拡大を示す(ヤンガードライアス)と考えられている(貝塚ほか1977、遠藤ほか1983)。

海域における変動は、海面変化だけでなく黒潮前線の位置にも現れている。黒潮の前線が遠州灘沖を通過したのは約13,000年前、房総沖を通過したのは約10,000年前、那珂湊沖に到達したのが約6,500年前とされている(第7図 鎌西ほか1983)。

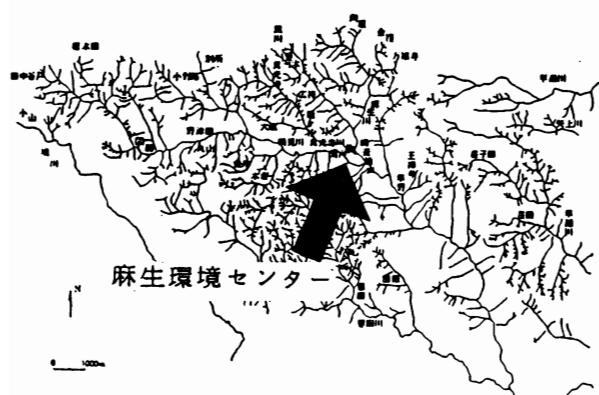
上記の様な環境変動が、植生特有の環境応答機構を伴って、植生変遷と現れてくることになる。関東平野で約20,000~10,000年前の古植生変遷をみると、寒冷期には平野部から標高500m前後までは、ショウセンゴヨウやカラマツ、バラモミ類などからなる温帯針葉樹林がシラカバを伴い広く成立していたとされている。その後約11,000年前までは寒冷期の要素に温帯広葉樹を比較的多く含む森林が成立した後、約10,000年前までカバノキ属とカラマツの優占する森林が成立していたとされている(以上、辻1987)。

### 4. まとめにかえて

氷期-間氷期のサイクルは、ゆっくりと進行する寒冷化とその後の急激な温暖化で特徴づけられる。まさに晩氷期から後氷期にかけては、自然環境にとって激動の時代であったと言える。環境センタ

一の調査では、約16,000～14,000年前の多摩丘陵の古植生が、亜高山帯針葉樹で特徴づけられる針広混交林であったことが明らかとなったが、<sup>14</sup>C絶対年代で縄文時代草創期に近いと考えられる約14,000～10,000年前までの古植生については、十分な資料を提供できていない。他の地域では、約13,000年前頃を境に温暖化に対応して、針葉樹林から落葉樹林への交代が起きる。一方最近、地球温暖化に関連して、グリーンランドなどの氷床コアについての酸素安定同位体比やダストの分析が高精度で進んでいる。特に晩氷期から後氷期への移行期におきたヤンガードライアス寒冷期（「寒のもどり」などと呼ばれ、約13,000～11,000年前まで温暖化-アレレード温暖期-した後、再び寒冷化、ピークは約10,700年前）について多くの報告が出され、7℃の気温上昇が数十年あるいは数年で起きたと推定されている（第8・9図）。

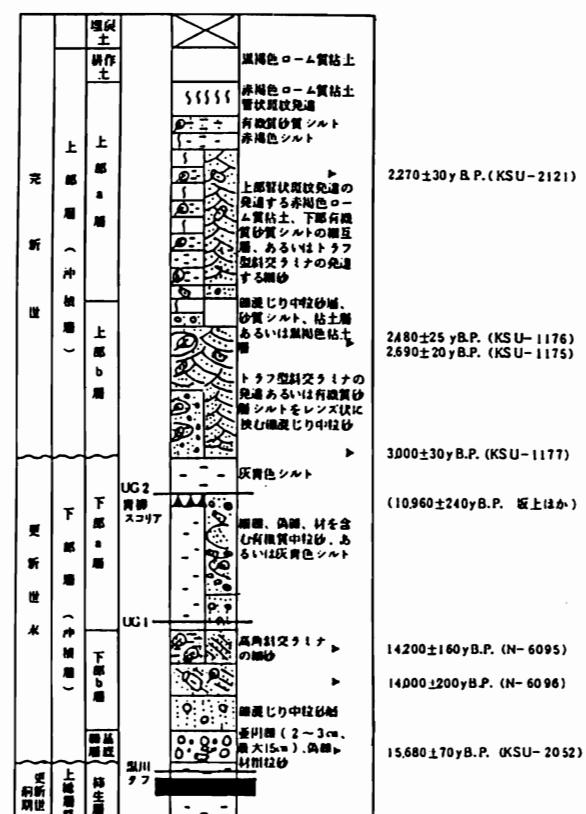
ヤンガードライアス寒冷期は、層準的には沖積層の下部層（7号地層）と上部層（有楽町層）との不整合層準に当たっているが、今後この時期の堆積物の検出に努め、ヤンガードライアス寒冷期前後の古植生復元を行っていくことは、かながわの自然環境変動を明らかにする上で、極めて重要と考えられる。また、このことは縄文時代草創期を人と自然との関わりのなかで位置づけていく上でも重要なことだろうか。



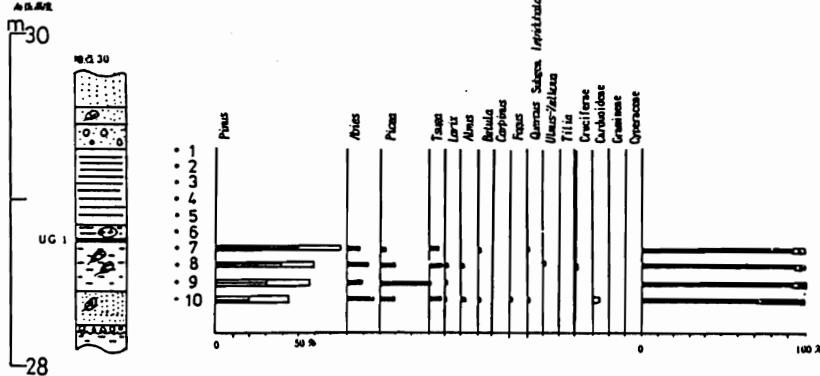
第1図 多摩丘陵中央部の鶴見川水系図  
「溝ノ口（大正8年）」「豊田（大正14年）」「荏田（昭和7年）」「原町田（大正14年）」をもとに作成した。

表1 麻生沖積層から出土した晩氷期の材化石（埋没樹）

樹種	下部基底疊層 (15,700年前頃)		下部b層 14,500年前
ニレ属（ハルニレ類）	○	○	
ヒメコマツ（ゴヨウマツ）	○		
カエデ属	○		
トウヒ属		○	
カラマツ属		○	



第2図 麻生沖積層地質層序



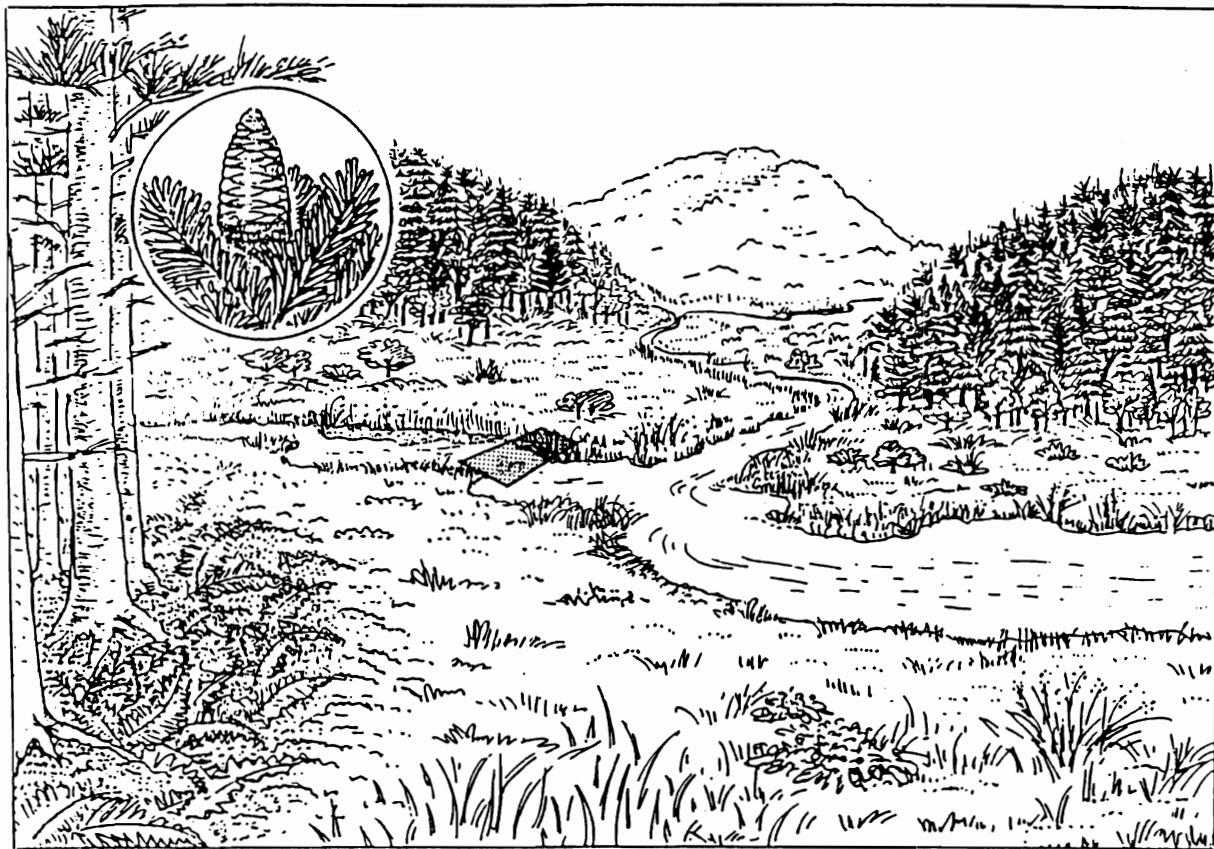
第3図 地点30の主要花粉ダイヤグラム

表2 麻生沖積層から出土した晩氷期の大型植物遺体

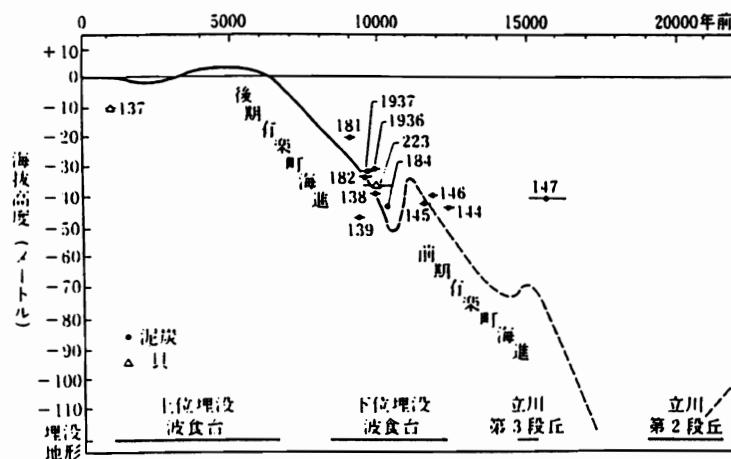
シラビソ	2	個
トウヒ属	5	個
ツガ属	3	個
チョウセンゴヨウ	14	個
ゴヨウマツ類	1	個
カラマツ属	5	個
ハシバミ	1	個
ツノハシバミ	1	個
ハンノキ属	6	個

層序	岩相	堆積環境	古環境	$^{14}\text{C}$ 年代		
下部 a 層	シルト  ▲▲▲ シ材 ル化 ト石 をまじ える 砂・  UG	氾濫原(後背湿地)  UG 2 青柳Scoria  強い営力のある流れ、洪水等	冷温帯から亞寒帯の針広混交林の総合? (マツ属単純管束亞属、トウヒ属、ツガ属、モミ属、カバノキ属、ハンノキ属)	-11,000  -12,000  -13,000	年前 先土器時代	後期更新世・最終氷期晩氷期
下部 b 層	炭含植 む物 砂遺 ・体 泥を	アルカリ性の止水域、池沼 ↑ 流れの緩慢な流水域	シラビソ、チョウセンゴヨウ、カラマツ属、トウヒ属などの針葉樹にシラカバ、ハシバミ、ツノハシバミ、ハンノキ属などの落葉広葉樹を交える冷温帯から亞寒帯の針広混交林	-14,000		
下部 基 礎 層	る材 砂化 礫石 をまじえ	河道  浸食谷の形成	冷温帯から亞寒帯の針広混交林? (ヒメコマツ)	-15,000  -16,000		

第4図 麻生沖積層による晩氷期の鶴見川中流部の古環境

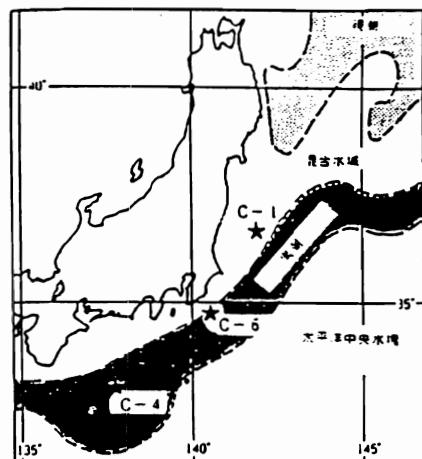


第5図 約16,000～14,000年前 シラビソなどの亜高山帯針葉樹で特徴付けられる亜高山帯～冷温帯針広混交林  
古真光寺川による浸食谷の形成、チャートを主とする河原が広がる。網は、麻生環境センターの位置を示す。



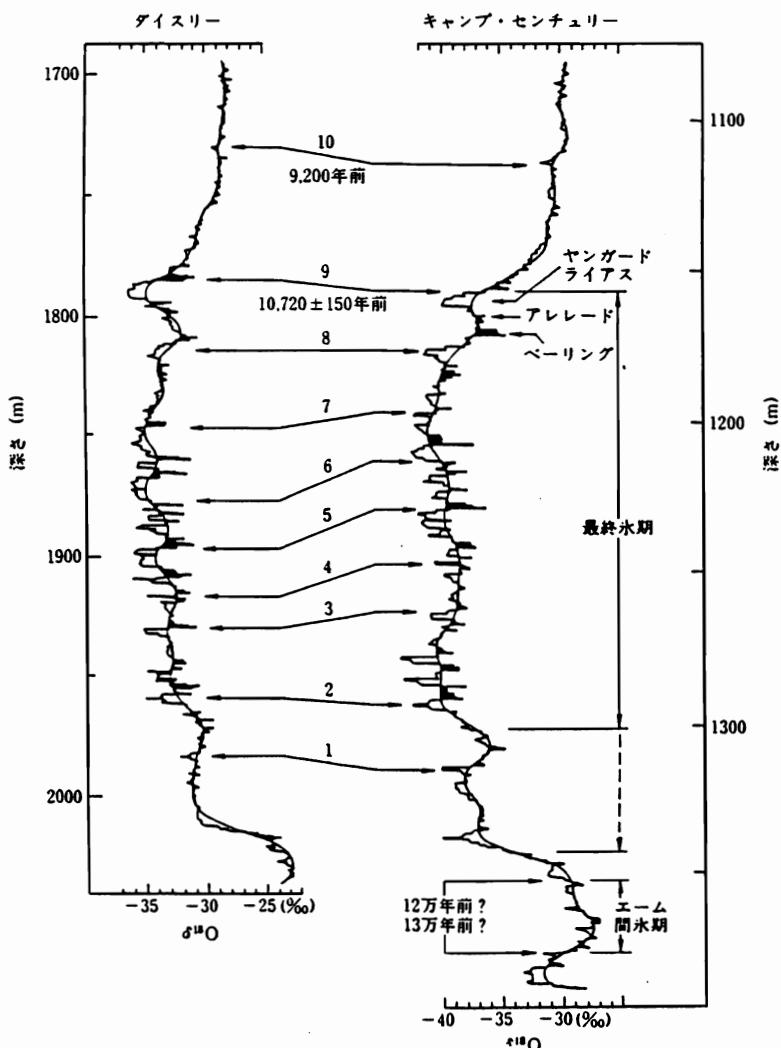
第6図 東京湾地域の沖積層の年代試料とその深さおよび埋没地形の推定年代

点線と実線は同地域の海面変化曲線。貝塚ほか(1977)による。図中の数字は  
学習院大学での年代測定のコード番号(Gak.)。

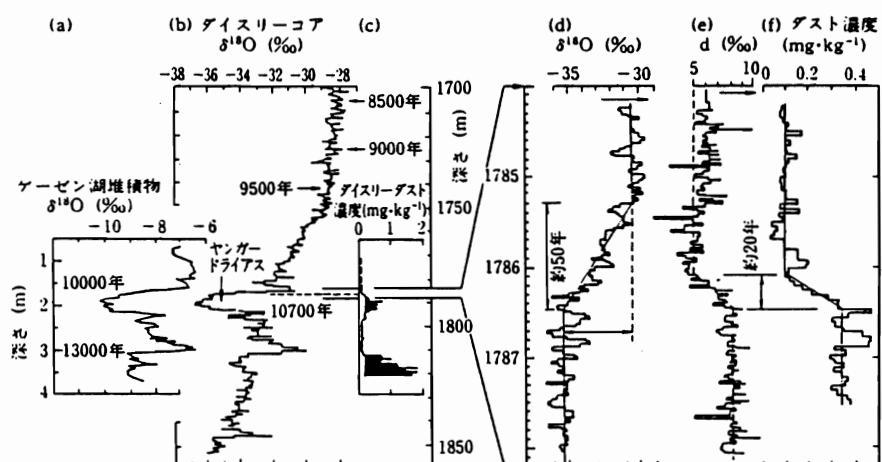


第7図 ピストンコア採取採取地点

星印はコア番号。北からC-1は那珂湊沖、  
C-2は房総半島沖、C-4は遠州灘沖です。  
鍋西ほか(1984)による。



第8図 ダイスリーとキャンプ・センチュリーコアの酸素安定同位体比  
同じイベントと思われる箇所は矢印でつないである(Dansgaard and Oeschger 1989)。



第9図 ダイスリーコアにみられる氷期から完新世への移行過程と湖底コアの酸素安定同位体比変動(a)との比較  
ダイスリーコアの酸素安定同位体比の遷移(b, d)がダスト濃度(c, f)および過剰重水素;d=δD-8δ18O(e)  
の遷移と詳細に比較されている(Dansgaard et al., 1989)。

---

『考古学講座 かながわの縄文文化の起源を探る』

発 行 神奈川県考古学会

編 集 白石浩之・村澤正弘

発行日 1996・3・3

印 刷 長谷川印刷

---

